
グレイゾーン2

サヤカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレイゾーン2

【Nコード】

N2120N

【作者名】

サヤカ

【あらすじ】

真夜中の宿で襲撃を受け、最悪の目覚めで旅は始まった。

虚弱な少年スティアと、そのヘガード〜リリィは、南大陸最大の都会を訪れる。

待ち受けていたのは、全貌の見えない謎の事件と、その隙間から覗くセイ・ホワイトの影。

突然現れた、正体不明の女――。

迷走する社会と錯綜する思惑。持つ者と持たざる者。科学と魔法。大人と子供。白と黒。

そんな感じの冒険ファンタジー。

(この小説は長編作品の第二章にあたります。一章…n3752.i)
(2011/7プロローグをリライトして続きの連載を始めました)

プロローグ

口の中で転がしていたビター・チョコレートが溶けた。

セイ・ホワイトはオープンカーの後部座席にかけながら、板チョコレートの次のかけらをパキリと折った。二人掛けの座席を足を延ばして占領し、壁にもたれるように寝転がっていた。

月がくつきりと浮かび上がる程度には暗い時刻だが、彼がいる場所には明るさが保たれていた。コンクリートビルの裏手に設えられた駐車場。レアリス・カンパニーのデカルト支部。街灯の明かりからもさほど離れていない上に、セイがいるオープンカーそれ自体にも、十分な照明装置が設置されている。

町の中では必要以上に見える照明装備だが、野外の走行に備えて改造したのだと聞いている。運転手の趣味だ。同じく、武器が車内にごろごろと収められているのも、運転手の趣味だ。自慢話を聞くのはしよっちゅうだったので、セイも自然とその名称を覚えていた。スナイパーライフルSR-T、ベルバルト・フォーティーン、アーミーナイフヘキラビー。ケースに並べられた弾薬や手榴弾を見るたびに、交通事故でこの車が炎上しないことを心より願わずにはいられない。

この車自体も、かなり高価なものだと聞いている。森の走行に耐える駆動力と、物理的な表面強度、内蔵したラジオの通信精度など、当時のカンパニーが持てる力の限りを尽くして生産した実用第一の高級モデルだ。

セイに与えられたこの車に限り、あえてのオープンタイプにされている。上司の手配によるオンデマンドだった。”視界”が少しでも広がるようにという理由らしいが。

（物理的に狭いことには変わりないな）

苦笑する。

足が長いのは自慢だったが、思い切り伸ばせる場所が少ないこと

には辟易していた。部屋と呼ぶには広さが無いこの空間を、精一杯に使って、精一杯にだらしない姿勢をつくると、こんな風に寝転がるしかない。

きちんと姿勢良く座った方が結局は負担が少ないのだろうが、大事なものは気持ちである、と思う。

座席下に脱ぎ捨てたブーツをちらりと見た。これができるだけで十分な快感だ。靴を脱ぐという、それだけのことにも日常ではひどく気を遣う。常に人目を意識して生きることを強要されて、数年経つ。

チョコレートのかけらがまた溶けた。次のひとつを、パキリと折る。

今の仕事についてから、セイは自宅に帰ることがほとんどなかった。この車が、彼にとってもっとも馴染んだ宿だと言っている。移動に使う、装甲可能のオープンカー。持ち主は、名義上は彼だが、実質的には彼ではない。

「あー、またチョコ食ってんですか、こんな時間に」

停まっている車に、ばたばたと近づいてくる影がひとつ。確認するまでもない。エルクだった。

デカルト支社から回収したふたりぶんの荷物を、彼は車の後ろに押し込んだ。そのまま、てきぱきと慣れた調子で、運転席に回る。

「夜に甘いもん食ったら虫歯になるって、お母さんとかに習わなかったんすか？」

「ガソリン補給だよ」

からかうような口調のエルクに、セイは適当な返事をする。

「これが切れたら、俺は止まるから」

「はいはい。ま、安心してください。セイさんが太ったら、洋服コレクションは俺が引き取ってあげますからね」

「サイズが違うだろ」

「やだなあ、着ませんよ。売るんですよ。当たり前っしょ」

運転席の扉を開いて、エルクが席に着く。手早くベルトを締め、

車内に固定していた武器の類を、定位置に移動させた。取り出しやすいようにしているのだ。それも見慣れた動作だった。

「太らないからな」

セイは、そこだけはこだわって言い返した。

「夜中に食べていいのは、一応、週末だけだって決めてるし」

「せめて、そのポジションを酒にして欲しかったんですけどね」

エルクが快活に笑い飛ばす。

セイは曖昧に苦笑した。――〈ホワイト〉が発眼したせいなのか、もともとの体質なのかは不明だが、酒に酔うという感覚はまったく知らない。何杯口に含んでも、味以外の点が水と何が違うかが、本当に、分からない。

自分の体質の特異性については、身に染みて知っているので、誰かに打ち明ける気にもならなかった。もちろん、エルクもそのことを知らない。深刻な下戸で、飲むことを医者に禁じられているということにしてある。

酔えない酒よりも、チョコレートの方がよっぽど疲れが癒える。

甘党というわけではないのだが、ビターのほろ苦い風味は、昔から好きだった。

そんな好物を手にして足を伸ばす、貴重な休息時間が今であったが、どんな時でも洋服選びだけには手を抜かないのが、セイのポリシーだった。今日の格好もそれなりに気に入っている。ヘンリーネツクのカットソーに、薄手のカーディガン。部屋着のような柔らかさだが、ショートブーツと合わせれば多少は引き締まるし歩きやすい。サングラスもあまり高級感を主張しすぎないシンプルなフレームを選んだ。腕時計の文字盤はカーディガンの縫い糸と合わせて紫紺にした。首元にはいつものネックレス。指輪もまたいつも通り、適当に選んでいくつか装着していた。これは癖のようなものだ。エルクには「ナックルみたいっすね」とよく揶揄されるが。

これから車で移動することを考えて、仕事中に着るようなコートやジャケットはあえて避けた。そういった、小さな変化を楽しむ

ことが好きだった。楽であることと、好みのデザインであることを両立させることは不可能ではない。――見合う体と、金があれば。セイは自宅に帰らない。無論、クローゼットが持ち歩けるわけではない。

だが、自宅に帰れないほどの多忙を強いるカンパニーは、交換条件として、よく立ち寄る街の各支社に限り、私物を保管することを引き受けてくれた。こちらから願ったこととは言え、本当に採用されるとは思っていなかった。自分の地位が高いのか低いのか、こういう時に分らなくなる。

現在はその措置に乗って、会社の担当者に管理の全てを任せ、荷物置き場としての部屋を大陸中にくつか借りている。基本はホテル暮らしなので、日用品の類がそれほど多いわけではない。街に置き去りにするのはほとんど、現地で買い揃えた洋服である。

社員の囁きは、当然、耳に届いている。――仕事できるし、礼儀正しいし、若すぎることを覗けば非の打ちようもないのに、人に手間かけさせて借りた部屋を、たまにしか使わない洋服で埋め尽くす癖だけはなんとかならないのかね。女じゃあるまいし。

会社がセイを過剰に優遇することへの不満もあり、物資不足の状況下で贅沢をしているセイ個人への非難でもあるだろう。自然な反応だと思う。だが、自分でも不思議だったが、言われていることに気づいているからこそ、何食わぬ顔で好意に甘え続けてしまう。他者から見れば悪癖だろうが、今のセイにとって、洋服集めはほぼ唯一といっていい趣味だった。個人的な娯楽で、誰かに迷惑をかける。

そのくらいのわがままは、許されてもいいと思う。

「しかしどうなるんですかね。これからのデカルト」

エルクは車のキーを取り出しながら、そう言った。

「事件の責任はテッドさんがまるまる被って、セイさんと俺は無罪放免って、ありがたいけど納得いかないな」

「まあ、テッドは確かに馬鹿だったけど、大まかには会社の事情だ

ろ」

エンジンが動きだし、消えていた分のライトも点灯した。

セイは慣れた調子で、体勢を整え、振動をもっとも和らげられる位置まで腰を移動させた。動き出した車が、駐車場の壁を抜けて、通りに躍り出る。

夜のサングラスは視界を致命的に遮るので、セイはそれを外した。どうせエルクしかない車の中でなら、周囲への配慮は必要ない。白い眼球をたたえた右目に、そっと手をかざす。これもまた、癖のようなものだった。

「今のカンパニーには、俺を休ませる余裕がない。代わりがいないから。反省する時間も与えられず、ひたすらに働かされるって意味では、テッドなんかよりよほど不幸なのかもしれないな」

「それは慣れっこですし、俺としては金もらえるからいいんですけど。でもスツキリしないな。あれだけ手間をかけたのにヘイエロー／＼は取られるし、リリィ・ブルーノも結局はテンプルの方に行っちゃったんですね」

「おそらく」

「あの子なら、いいガードになりそうだったのに。可愛かったし」

「お前は本当に、誰にでもそう言うよな」

パキリと、チョコレートを折りながら、呆れてつぶやく。

エルク・トールとは、今の仕事についてから、ずっと行動を共にしている。〈ホワイト〉が発眼してからは、セイの体は限りなく”不老不死”に近づいたと目されているが、自分の身を守るための警備は、いっそう厳しくなった。この矛盾は、下手に刺激を加えることで、もしものことがあってはならないという、上司の強い意向による。〈セカンド・グランドクロス〉による予想外の損害が、記憶に新しいのだろう。

そういった事情で、会社はセイの身の回りを警護するために、専属のガードを側につけることを決定した。それも、悪目立ちを防ぐために、エリート然としていない者を。私服警備員っすね、と、初

めて会った時のエルクはそう言っていた。

出会った時に、彼は十九。当時二十歳だったセイとの歳の差はただのひとつ。これも会社側の配慮だったのだろうが、当時のセイは逆に警戒をした。余計なお世話だと思った。歳の近い人間との連携は、表面上の親密さを強要されているようで、苦手だった。

幸い、実際に話してみるとその心配は杞憂だった。エルクは外向的な人間だが、特に押しつけがましい所もなく、白い右目を見ても特に嫌悪も気遣いもしなかった。目の色や形が重要なのは女性の方で、男はどんな顔をしていても興味ないっす、と明るく断言した失礼な態度が、セイの好感を呼んでいた。

自分は人間関係に恵まれていると、セイはそう思う。

右目に得体の知れない力が覚醒して、周囲の人間にもみくちやにされた記憶は未だに生々しい。運命じみたものに押しつぶされそうになり、将来に絶望した回数が、一度や二度ではなかったことも、確かだ。

だが、不幸ではない。浅い絶望と浅い満足を行き来して、こうして毎日生きている。

きつと、それは大事なことだ。

「逆に知りたいっすよ。セイさんはどんな子がタイプなんですか」
エルクが心外だとも言うように、そう言った。――それだけの雑談が、チョコレートに触れていたセイの指を、確かに止めた。

景色が流れていく。大通りから、郊外へ。郊外から、街の外へと続くゲートへと。

「俺がどんな子を褒めても、同意がテキトーなんですもん。張り合
いがないよな。ここまでくるとつまらないを通り越して不健全っす
よ」

「そこまで言うか」

「それだけ着飾ってかっこつけてるくせに、俺がこの仕事を得た二
年前から、女の影が一切ないって、どうなんすかそこんどこ。へホ
ワイト」がどうか気にしてるなら、馬鹿でしょ？ あんたみたい

な、背が高くてやたらと洒落てる金持ちついでに性格ちょっと優しい、みたいな男なら、片目が白かろうが構わないなんて女の子、いっぱいいますよ」

「そんな気分じゃないんだよ」

セイはそつと、首にかけたアクセサリーに触れた。

「朝から晩まで仕事、仕事で、一所に留まってもいられないのに」

「言い訳の定番っすね。俺に言わせれば、仕事で死ぬほど疲れてるからこそ、甘えさせてくれる女の子とか、甘えてくれる女の子とか、まあとにかく女の子が不足するのに」

「疲れてなくても、どうせ不足するんだろ」

「男ですからね。なのにセイさんのそういう話、振ってもかわされるし。好みのタイプくらい聞いて安心してみようかなーと」

「なんで不安がられてるんだよ……」

指をそつと動かした。ダイヤモンドがあしらわれた華奢な指輪を、鎖に通して作ったネックレス。

人差し指と親指が、宝石を挟んだ。指の腹でその硬さを、もてあそぶ。

少し悩んで、ぽつりと告げた。

「猫、かな」

「は？」

「猫みたいな人」

ダイヤモンドの指輪は、手の中で沈黙して何も言わない。光が少ない夜の車で、照明の明かりを吸って周りにまき散らしている。錯覚かもしれないが、セイにはそう見える。

本物の宝石だった。人生で一番高い買い物だったことは間違いない。

この車や、護身用のハンドガンのように――あるいはエルクのように、上から与えられたものではない。〈ホワイト〉のように、生まれつき持っていたものでもない。

自分の意志で買ったものだった。

洋服を選ぶことに手を抜かないのが、セイのポリシーだった。旅から旅を歩いて、私服を持ち歩くことはほとんどなくなっていた。

同じ服を繰り返し着ることは少ない。必需品であるサングラスさえも気分で変えてしまう中で、ずっと身につけているのは、このネックレスだけだった。

「セイさん……」

エルクのつぶやきが思っていたよりも低かった。怪訝に思ってたバツクミラーを見ると、苦い薬でも飲まされたような顔をしていた。

「なんだよ」

「エッロ」

「は？」

「変態くさっ。どうしよう、やだ、態度が紳士な分、本当にうさくさい。俺、聞いたら聞けないこと聞いちゃったんですか、もしかして」

「……………」

「俺これからセイさんのこと、ムツツリセイちゃんって呼んでもいい気がするんですけど、どうっすか」

「『ちゃん』付けはやめろ」

「うわ、そこなんだ。大事なところスルーした」

「そうじゃなくて……」

セイは髪に手を突っ込んで頭を抱えた。髪型には気を遣っている。普段はしないリアクションだったが、そうせずにはいられなかった。

「嫌なこと、思い出すから」

エルクはその返事を不可解に思ったようだった。だが、すぐに街の外に出るゲートが近づいてきて、慌ててライセンスと身分証明書の準備をする。セイ自身もチョコレート最後のひとかけらを口に放り込んで、ブーツに足をつっ込みながら、右手の指を舐める。おのおのが恰好を整えているうちに、会話はうやむやに溶けていく。

セイは改めて指輪に触れた。デカルト・シティの風景を改めて目に焼き付ける。遺跡を解析して、寄り添うように営まれた研究都市。

あの街とはやはり、雰囲気がまるで違う。

本当に、せめて猫を飼いたいと思った。街で保護された愛玩動物の狂暴化は、野生動物に比べて進行が遅い。叶えることができないわけではない。

だが、人の手に渡った後、”発症”したケースもゼロではない。むしろ、増加傾向にある。

たとえば瞳が灰色に混濁した化け猫だとしても、自分は愛することができるだろうか。

きつと、溺愛するのだろうか。

あきらめのような納得が降りたと同時に、車がスピードを落とした。ゲート検問所で停止すると、係員がこちらに近づいていた。

朝露が香る、潤沢の空気に育まれて、森はその根からすべてを吸い上げて生きる。水と生き物の死骸とをたっぷり含んだ土。あるいは生き物の死骸そのもの。もしくは、死骸に見捨てられた文明すらも。

それは、天災や事故ではなく、明らかに人為的に破壊された建物だった。人為的な破壊によって、無防備になった家屋を蹂躪するうちに、木が根を張っている。自衛を忘れた瞬間に、人類は森に負ける。増殖した緑に、いくらも待たずに吸い込まれてしまう。知識としては覚えていたが、リリイが実際にそういった建物を見るのは、初めてだった。

目の前にある家屋が、かつて森を切り開いて作られたものだと想像するのは易しかった。敷地を主張するような柵があり、〈シェルター〉として機能していたと思われる機械の部品も散らばっている。個人が所有する一軒家にしてはかなり広かった。一階建てだが、三世帯は暮らしているような大きさである。もっと単純な連想としては、小さな宿屋のようだった。おそらく、その連想は間違っていないのだろう。地図には載っていないが、補給地点としてこのあたりに〈ロッジ〉が建てられるのは、開発計画として自然である。

壊されてから経った歳月は、決して短くないようだ。

柵の位置から考えて庭も確保していたのだろうが、今はすっかり森に飲まれて荒れている。平らな箇所がほとんどない。いたる所で植物の浸食を受けて、ツタや根が絡みついていて、美しい花が咲いていたりするのが、まるで家から生命力を根こそぎ吸ったようで、不気味だった。

家の壁には、獣の爪痕とおぼしき傷や、明らかに銃撃でできた穴、そして古い血痕が派手に散らばっていた。

窓がぼっかりと開いていて、中は墨のような暗黒だった。粉々の

塵となった窓ガラスは、ほとんどが建物の内側に入り込んでいるようだが、外側に落ちたものもいくらか確認できた。ちよつとやそつとの暴力では、ここまで細かい欠片にはできまいと思った。――連射銃ならば、容易だろうが。

「ひどい……」

ぽつり、とつぶやく少女の声が、この場にいる全員の心境を代弁した。

車の運転席から、リリィはバックミラーに視線を移した。後部座席に座る銀髪の少女が、口元に手を添えている。

「どうして、こんなにされちゃったんだろう……」

車の外にある家屋を見て、彼女は呆然としている。だが、ふわふわと浮いた穏やかな口調ばかりは、いつも通りだった。地であるらしい。

長い銀髪。作りもののように美しい碧眼。森で見るとはおよそ似つかわしくないワンピース。とても美しいがそれゆえに、左目を隠した眼帯が悪目立ちしている。

「すごい。たぶん強盗だね、これ」

続く声はいくらかのんきだった。やはりバックミラーに映った顔を確認すると、先ほどの少女とそっくりな顔が隣にある。

銀髪に碧眼。中性的な細面に、両耳につけたシルバーピアスが似合っている。それだけの特徴でも十分に希有だろうに、実質的な印象のすべては、その体格がさらってしまっていた。――病弱さを感じさせるほどに、極端に痩せた少年だった。季節外れの長袖のジャケットの袖口から、これまた不自然に皮の手袋が除いている。

「ちよつと降りていい？」

少年――スティアは、リリィに向けてそう言った。リリィは少し迷ったが、頷く。

エンジンは切らないままで、三人は車から外に出た。アイドリングを続ける車体から離れ、弾力のある地面を踏みしめ、壊れた家にそつと近づく。

今すぐに危険があるとも思えなかったが、リリイは装備を整えて、あたりを警戒した。腰と腿に携えた二丁の拳銃と、手に持った大型ライフル。

街から離れた深い森は、命の気配に満ちている。だからこそ、危険の接近を察知するのは非常に難しいが、おそらく人間は近くにいないだろうと思われた。辺りの道や木々に、踏まれた跡がまったくない。

こちらの警戒とは裏腹に、スティアはひよいひよいと軽い足取りでその家に近づいていた。ついていった妹――ロールと並んで、検分をしている。

「相当古いよ、この〈シェルター〉」

スティアが、壊わされた機械の欠片を見て断定した。

「今、広く使われてる規格は、外からの破壊にはもうちょい強いはずだ。大砲でも使わない限り、ここまで粉々にはならない。……でも、まあ。外側からの攻撃をシャットアウトできるって点は、古いのも新しいのも変わらないはずなんだけどね」

「……えっと？」

「この家が〈シェルター〉に守られてたなら、内側から襲撃を受けたってこと」

今時のやつは、こんなに簡単壊せないけど、と彼はつけたした。

「バリアの中に入り込んだ裏切り者が、バリアを制御する装置を壊したんじゃない？」

「つまり……」

「宿屋を開いていたら、客に裏切られてぶっ壊された。そして無防備になったこの場所を、獣が食い荒らした。それが妥当な線かな」

リリイは、悲しさが沸き上がるのをごまかそうと、髪をかきあげていた。激しい動きにも耐えられるように結んでいるのだが、背中に届くほどの長さになれば、耳のまわりの細い一房が時々滑り落ちてくる。

自分の格好を見下ろした。――いっぱしの〈ガード〉たちに比べ

れば今は軽装だが、殺傷能力のある武器は、いつでも使えるように装着している。自分の身を守るために。依頼者の無事を守るために。悪用することが易しいことも、知っている。

「〈ロッジ〉ってのは、街に接続されていない分、どうしたって無防備だからね。昔は〈ガード〉による強盗事件が多かったとは、俺も聞いたことがある」

スティアは何の気もなさそうにそう続けた後、ようやくこちらを見て、すぐに吹き出した。

「別に、あんたがやらかしたわけじゃないでしょ。しよげなくても」
「でも、他人事とは思えないな……」

「これは昔の事件だ。今は、カンパニーとか技術者とかが全力をあげて、シェルターの制御装置を頑丈にしている。ここまでひどい被害は、滅多にないよ。ガラスや壁だって、どんどん要塞じみて頑丈になってきてるはずだし……むしろ、この家がこんなに貧弱なのは、不自然だよな」

スティアは途中で疑問に思ったようだが、すぐに口調を戻した。

「どっちにしろ、この家が廃墟になってる直接の原因は、シェルターを失って獣に突撃されたからだ。まあ」

スティアは最後に口調を変えて、小さく肩をすくめた。

「悪意があれば、バリア内部のすべてを、血祭りにあげるとは今でも可能だね。それは否定しない」

〈ロッジ〉とは、森に建てられた、旅人のための宿だった。

実質的には、〈ガード〉とその雇い主が〈狂獣〉から逃れて休息をとるための場所だ。鉄道計画が行き詰まって以降、宿泊施設を小型〈シェルター〉で守る計画が、政府によって打ち上げられた。〈シェルター〉の開発元であるレアリス・カンパニーと正式に提携をし、現在、少しずつその数を増やしている。

開発の初期は、都市に見捨てられた工場や浄水場に〈シェルター

＼を設置し、寄り添わせるように宿を建てたと言われている。場所によっては、そのまま村のように発展したケースもあるらしい。

むしろ、無防備な方が珍しいのだ。リリイは車に戻ってドアを閉めながら、ガラス越しにもう一度その廃屋を見つめた。火事場泥棒に、装備を根こそぎ盗られてしまったのだろうか。それもありえる話だった。

地図に残らない、おそらくは人家だったであろう場所。

やがてリリイは目をそらした。アクセルを踏んで、車を発進させる。

植物が異常にはびこる深い森を、一筋に貫いた街道。

ここから先はもう、分かれ道がない。

直進すれば着くはずだ。スティアが定めた目的地は、情報都市ユング。デカルト以上の都会であるはずだ。

「あ、ごめん。ちょっと寄り道してくれる？」

残りわずかとなった道のりに、運転手のリリイがやる気を出したところで、後部座席のスティアは水を差した。

地図を片手に、運転席の方へ乗り出してくる。はじめから助手席に座ればいいとは常と思うが、彼は「助手席で眠ったら、なんか申し訳ないし」と言っ、たいてい後ろの席に乗る。

「待ち合わせしてるんだ」

「え？」

「ここまでの道程で思い知ったでしょ。俺たち、街の外では目立つから」

デカルトから出立して、数日が経った。運転を交代する人員が不足していることもあり、夜はなるべく「ヘロッジ」を利用した。

つい孤独感が先立つような広大な森だが、それでもリリイが事前に想像していたよりは、旅人の数は多かった。大型車で旅行者を運ぶ、数人連れのガードもいれば、輸送業者の貨物車を守るガードもある。中でも、先日泊まった宿に関しては、鉄道の整備士が多かった。どうやらこの地区に派遣されたらしいが。

とにかく、宿に近づけば、それらの集団と近づくことになる。街から出たことのなかったリリイにとって、彼らの会話は非常に興味深く輝かしいものであったが、聞きながら警戒心を強めざるをえなかった。――一言で切れば、柄が悪い。屈強で強靱な、百戦錬磨の男たちが、外の世界を股に掛けて戦っているという現実が、確かにあった。

若い女性とは、それだけで目立つ。ましてや、スティアとロールとリリイの三人ぽっきりとなると、なんの集団だか意味不明であろう。スティアの痩せぎすな体や女性的な顔なんかも、リリイ以上に浮いている。

依頼主とガードなのだから、胸を張ればいいのだろうが、それは理屈だった。新米であり、十七歳の女である自分に、貫禄が身に付くはずもない。

自身の問題を除いても、女性のガードが単独で仕事を受けること自体が、珍しいのだ。――女性の旅人を中心に、女性を含めたガードのパーティのみに依頼をしたがる人間は多くいるので、存在自体は世間に認知されているのだが、あくまで補佐的な役割に徹することが多い。チームを組んで仕事するのが普通だった。

リリイ自身もそうなるであろうと思っていた。今の旅はいわゆる〈ガード〉とは別の仕事なので、こういった形になってしまったが。「街に入る前に、カモフラージュ要員がひとり、テンプルの仲介で派遣される手はずになってる」

地図の一点を指しながら、スティアは言った。

「カモフラージュ？」

「俺たちのガードのふりをして、一緒に街まで入ってくれる本物のガード。リリイはその補佐役を演じてくれれば多少は自然でしょ」

言いながら、スティアは自分の通信機を取り出した。デカルトにいた頃は持っていなかったはずだが、出立と同時にレイバにもらったらしい。

「でかい街の入り口だと、たぶん身分照会もあるからね。手持ちの

ライセンスでシェルターを越えると詐称がバレるから、そっちをどこまかすためでもある」

彼は通信機のボタンをいじって、画面を確認していた。おそらく、レイバが誰かとその件について話したメールでも確認したのだろう。「腑に落ちないなあ」

リリイは我知らず、唇をとがらせていた。

「私だけじゃ不服だって言うなら、最初から四人連れにすればよかったんじゃない？」

「テンプル的には、たかが使い捨てのガードごときにヘカラストーン」とか「ブラック」の情報は渡したくないんだってさ」

スティアは、心底どうでもよさそうに答えた。

「ヘカラストーン」だけだったら、ここまで警戒レベルあげなかったんだろうけど。〈ブラック〉について色々知られるのは危険だからね。基本的にそのへんの情報は当事者である俺とロールが管理して、レイバに通達するようになってる。戦力が必要になったら、現地で調達してドライに別れるって言う方針らしい」

「……私って何？」

「リリイを雇ったのは、あくまで俺のボディガード。攻める意味では、そこまで大それた活躍は望んでないから、気負わなくていいよ」

断言されるのも複雑だったが、確かにそういう契約ではあった。

「見えた、通信塔。あのへんで車停めて」

スティアがフロントガラスに向けて手を伸ばした。人差し指が示す先に、植物を突き破って空に延びる、鉄の塔がある。

金網で防御された鉄塔は、町中でみるものよりかはるかに立派だった。森の中での通信を、ある程度だけ可能にする設備である。

「ヘシェルター」は付いてないんだ……」

「どこもかしこも付けられるわけじゃないからね」

鉄塔のふもとに車を停めた。同時に、スティアが無造作に扉を開けて外に出る。

ぎよつとしたが、彼は何も気にした様子もなく、通信機を手元でいじりながら、周囲を見回した。武器も防具も身につけず、無警戒に、無防備に外に出るということが、リリイはいまだに信じられない。――頭では、彼の行動がそれほど無鉄砲なものではないと分かっている。

バックミラーをちらりと見る。後部座席に残されたロールがのんきに座っている。

街の外の森は、獐猛で凶暴な獣が徘徊する危険地帯であり、武装した専門家の手助けなくは、通り過ぎることすらできない。

それがこの大陸に「グランドクロス」と呼ばれる天災が起きてからの摂理であり常識だった。

だが、この少女の存在が常識を覆すのだと、知り合いの科学者が懇切丁寧に説明してくれた。それは事実だった。リリイもここに至るまでの短い旅路で、否応なく実感した。

（ロールちゃんがいる限り、獣は彼女を恐れて近寄ってこない……）窓ガラスの向こうで、スティアが不意に視線を一カ所に定めた。

リリイもつられて目をやる。街の方角から、小型車が走ってくる。年季が入った車だ。はつきり言えば、ぼろである。

車はスティアの手前でブレーキをかけた。運転席から一人の男がのっそりと地面に降りた。

リリイは、車の窓を開けて顔を乗り出した。

車から降りた男は、こちらに向けて適当に片手をあげて近寄ってきた。背が高く、がっしりとしたその体躯は、いかにも自分はガードであると主張するようだった。

こざっぱりとしたこげ茶色の短髪。旅慣れた印象を受けるくたびれた軽装。

頬から鼻筋にかけて、派手な傷跡があった。刃物で一直線にないだように、まっすぐに。

「初めまして」

挨拶の言葉を紡ぎながら、彼は笑顔のひとつも見せなかった。

「エイトだ。街まで送り届ける」

エイトと名乗る男を運転席に据えて、リリイは助手席に追いやられる。小柄な人間ばかりだった車内が、急に狭く感じられた。

席につくなり、エイトは煙草を取り出して口にくわえた。断りもなく火をつけて、たぷりと吸って、吐く。車内に独特の香りを遠慮なく広げてから、彼は灰皿がないことに気づいて一瞬だけ瞬きをした。隣に座るリリイを見てすぐに、そりゃそうかとも言いいたげな顔に変わったが。

「変な仕事だ」

携帯灰皿を取り出しながら、彼は笑いもせずになんと言った。

「森で突っ立ってる女子供を街に運ぶだけ、とかよ。そんなツラして、どんな橋を渡ってるんだか」

「大したことはしてませんけど、まあ、上が秘密主義なもので」

後部座席のステイアが、やたらと友好的な笑顔でさらりと返事をした。

「上”ね」

エイトは笑った。どちらかと言えば嘲笑に見えた。「いっちょ前に」

「最底辺から見れば、みんな上ですよ」

「ま、金をもらった以上はなんでもやるのが俺の役目だ」

エイトはそう言って、ハンドルに手を置いて重さを確かめた。「ためエラを売り払ったところで、リスクに対して、利益も少ない」
「うわ、超安心」

脅すようなニュアンスを含んだエイトの言葉を、ステイアは受け流した。ちやかすような言動にリリイは内心気が気でなかったが、エイトに気を悪くした様子はなかった。――良くした様子も、あるわけがないが。

エイトが車を発進させた。彼がここに来るまでに乗っていたぼろ

車と、すれ違う。置き去りにするらしい。

「あとで〈ギルド〉の奴らが回収するらしい」

こちらの疑念を先読みして、エイトがつぶやく。スティアが首をかしげる。

「だったら、一緒に来ればよかったのに」

「知るか。奴らのやり方に口出しをする気はねえよ」

「おかしくないですか？ 自分の後始末を味方がどういう風につけるかくらいは知っておくべきでしょう。あやふやな認識があると、チームワーク崩れませんか？」

素朴な疑問を口にしただけというように、スティアが言う。エイトは苛立たしげに呟いた。

「チームワークもクソもあるか。そもそもチームじゃねーよ」

「雇用関係でしょ」

「主従関係を気取ってるんだろ。そういう種類の仕事には俺も慣れてる」

「そういう種類？」

「めんどくせーな……」

止まらない質問に辟易するエイトの強面が、一瞬だけ、初等学校の教師がよく見せる、呆れのような渋面に見えた。

「用意された道筋を外れると、依頼人が俺に見せたくないものを見るハメにもなるってことだ。てめーらも、あの組織に遣われてるなら余計なことはすんな。めんどくせーことになるから」

「へえ。そういうこと」

スティアが軽い口調で相槌を打つ。「親切にどうも」

「てめーでさんざん聞いておいてナメてんのか。俺が関わってる間に、面倒ごとを起こしてほしくないだけだ」

エイトが不機嫌に吐き捨てる。リリィはその仕草を隣で見ている、怖いけど、なんだか変な人だなと思った。

「エイトさん、ね」

後部座席のスティアは、なにやら楽しそうに、ハンドルを握る強

面の名前を反芻する。「八男ですか？」

「本名じゃねーよ。適当に決めた」

「でもガードのライセンス持ってるんですよね。あれって本名登録じゃないとまずいんじゃない？」

「てめーの知らねえやり方なんぞ、いくらでもある。ライセンスも名前も、いくつ持ってるのか覚えちゃいねーよ」

「ふうん……」

スティアが、妙に感嘆した声を出す。それで会話は終わった。

しばらく街道を進んでゆくと、木々の隙間から大きな街の外観が見えてきた。ロールが表情を明るくする様子が、バックミラーに反射していた。

街道の右脇に茂っていた木々が突然開けた。植物で隠れていた向こう側に、街道と平行して走るような、線路があった。鉄で出来たレールが、森を貫いてまっすぐに伸びている。

「線路がこんなに近くに……」

思わず、声に出していた。スティアは、特に驚きもせずに言葉を継いだ。

「街が近い証拠だね。終着駅はユングになるはずだったし」

線路が伸びてゆく先に視線を投げると、確かに街の方角だ。街道とは二股に分かれ、中心部に直接繋がっているようだった。

「港町テレスから、遺跡街デカルトを経由して、情報都市ユングまで、サウスグラウンドを縦に繋ぐはずだった鉄道計画」

スティアが、諦めきったように皮肉に笑う。

「実現しなくて残念だ」

ユングの入り口に設置されたゲートは、デカルトで見たものと同じような造りをしていた。半透明の壁の一部に設置されたコントロールパネル。

周囲を警戒しつつ、エイトが持っていたライセンスを開門装置に

翳して、内部と疎通をとり、街を覆うバリアを割る。前室を経て、内側から認証を得、ようやく街の中に入る道が開く。

半透明の壁が取り払われ、視界が開けた。

ゲートは町外れに作るという規定があるので、街まではまだ遠かったが、それでもリリイはここが都会だという事実を一瞬で意識した。遠めに見て、高い建物が目立った。高速建築。多くの人間を生かすための技術である。

ゲート近くにある詰め所から、係員が数人、車に近づいてきた。

エイトが窓を開ける。心得たように係員が口を開く。

「ライセンス、見せて」

エイトが無言で左手首を突き出すと、係員は手に持った小型の機器をライセンスに翳した。ピツと音がする。画面モニタに何かが表示されたらしい。

「名前は？」

「エイト」

「フルネームで」

「エイト・シャノワール」

「……誕生日を教えてくださいませんか？」

エイトが身分証を出す。確認した係員は、頷いた。

「オッケーです。お帰りの際も検問にご協力ください」

手信号での案内に従って、車を前進させた。舗装されたアルファルトの道に入った。街の中心部に向けて伸びているようだった。

このあたりは倉庫街になっているようだった。道はかなり広い。倉庫にまぎれて巨大な材木工場が建っていた。森から伐採したばかりと見える木が、広い敷地に転がされている。

もう少し進むと、ほかにも工場があるのだろう。煙突が遠目にいくつに見える。

「ロτζジと同じで、入場だけならできるんだけどね」
スティアが、後部座席でぼやいた。

「でかい街だとカンパニーの権力が強いから、今みたいにジロジロ

見られるし、登録してる個人情報も聞かれたりする。俺たちの外見じゃ目立つから、いたずらにマークされることもあるだろうし」

「そっか。父さんのライセンスじゃ、正しく答えても齟齬になるかもね……」

少なくともリリイが「ガイル・ブルーノ」を名乗っても説得力がない。スティアはスティアで、どう考えてもガードには見えない貧弱な外見なので、別の意味で同じくらいに説得力がない。

「レイバの奴、ほんとに何考えてるんだろ。ガイルさんっぽい男を専属ガードでつけるとか、女性からライセンスを買い取るとか、他にやりようがあっただろうにさ。何かと理由をつけて、そうしなかった」

「むしろ自分が来ればよかったのにね。ちょっと頼りないけど、それなりの格好をすればそれなりのおっさんだし」

「……あいつと一緒に旅するくらいなら、俺、死ぬわ」

スティアが心の底から嫌そうにぼやいた。その口調に、リリイは少し驚いた。――仲が良いと思っていたのだが。これも、遠慮がないということだろうか。

「手駒に、権力を持たせたくねえんだろ」

エイトが不意につぶやいた。予想外の指摘に、リリイもスティアも思わず目を見張る。

「言っただろ。あの組織の用意したレールを疑うな。面倒ごとにながるから」

「どういことですか」

「ちったあ考えろよ。簡単なことだろ。ガードの足跡を外部から正確に把握するなんざ無理だ。それこそ、ゲート検閲履歴を参照できる立場の、カンパニー社員とかでもない、通信機からの自己申告を信じるくらいしか手段がない。……違う。カンパニーの社員だって、全国的な履歴を参照すんのは無理だろう。それが可能だったら、俺もとっくに捕まってる」

エイトの言葉を聞いて、リリイは自分の父親を思い出した。――

プロのガードとして生き、三年前に命を落とした。だがその情報は娘であるリリイに通達されることがなかった。最近までずっと、父は生きていると信じさせられていた。

「てめーらみたいなクソガキに、自由に外を飛び回る権利を与えちまえば、手元にとどめることすら難しいからな。監視したいんだろ。だから、自分たちの補助なしでは動けないようにするのは自然なこった」

「周到だね。……まあ、今に始まったことじゃない」

スティアが、自身の耳に触れる。レイバが突然つけるようにと提案したシルバーピアス。発信機になっているのだと、後で聞いた。

「それも一種のギブ&テイクだろ。自由を奪われる代わりに保障が得られる。上手くやりたいなら、てめえの身分を弁えるのが肝心だ」
それから、しばらく無言で車を直進させた。

倉庫街をまっすぐに通り抜けて数十分、ようやく、車道の脇に歩道と思われるスペースができた。問屋とおぼしき店舗がちらほらと見え始め、やがて道を行き交う人数が、徐々に増えていた。

川があった。舗装された橋を車で渡る。そこから雰囲気ガラリと変わった。人家だ、とリリイは直感的に思う。生活の匂いがする家がある。宿も多いように見えた。宿泊費ばかりを主張した安っぽい看板がいくらか見えた。

バス・ステーションと思われる看板があり、そこから急激に人口が増えていた。まっすぐに延びる大通りと合流し、祭りでもないだろうに、人がひしめいている。通りに沿って並んだ街灯の造形がきれいだった。新しいものなのだろう。

郊外から見えた高層建築の群は、もっと街の中心に近いところに集まっているらしい。だが、すでにデカルトなどよりはよほど賑やかだった。スピノザという名の住宅街で生まれたリリイにとってはデカルトも都会だったので、新鮮だった。

なによりも驚いたのは、車が多かったことだ。輸送車やバスの類だけでなく、個人が所有するオープンカーや、明らかに凝り性のガ

ードが使っているだろう装甲車も見える。――旅人が多いのだ。

「このあたりか」

エイトが言う。

「俺の仕事は、通信塔の下で待ってる三人連れを街に入れることだけだ。このへんまで届けりゃ、あとはどうとでもなるだろ」

「運転手のあなたが降りるのも変な話じゃないですか。どこか降りたい場所があれば、そこまで転がしてくれても、別に」

スティアが言うと、エイトは首を振った。

「余計な世話だ。それにどっちにしろ、俺の今のねぐらは郊外だから、通り過ぎた。ここでもいい」

「郊外？」

エイトは車のスピードを落とし、歩道沿いに停めた。

啞然としているうちに、エイトは手早く荷物を拾い上げた。ドアを開けて、歩道に降りる。

振り返って、告げた。

「雇い主からの伝言だ。『ギルドは〈生産区〉にある。場所を調べて、滞在中に一度は顔を出すこと』」

「……ああ、なるほど」

スティアが、意味深に納得した。

「以上だ。依頼主には俺の方から報告をしておく。失礼するぜ」

「あ、ちょっと待って下さい」

スティアがエイトを呼び止めて、後部座席から身を乗り出す。

「スティア・アリビート」

「あ？」

「俺の名前です」

通信機を取り出しながら、スティアはもう一度エイトを見た。まっすぐに。

「連絡先を教えてください」

「あ？」

エイトの顔が歪む。驚きと、いらだちに。

「ざけんな。不満ならギルドを通せよ。俺はこの仕事に責任なんざ持つ気はねえよ」

「そうじゃなくて。あなたは『金をもらえる以上は、深入りしないで、なんでもやってくれる』んでしょ？」

リリイもロールも、わけがわからず、ただスティアの言動を見守ることしかできなかった。

「俺だって四六時中、ギルドにおんぶだっこされてるわけじゃない。優秀な人の情報はいくらでも知っておきたいんです」

「俺を転がせるほど、裕福には見えねエんだがな。小僧」

「数回くらいなら、あなたを満足させられるくらいの蓄えはあると思いますよ。上はけっこう俺のこと可愛がってくれてるんで」

スティアが笑う。エイトはその笑顔をじっと見た。友好的で、明るくて――ふてぶてしい。

負けたのはエイトだった。目をそらして、つまらなさそうにつぶやく。「紙」

視線を感じて、リリイは背筋を伸ばした。彼の欲するところを察して、鞆から手帳を取り出す。手渡そうと腕を伸ばすと、エイトは半ばひったくるようにそれを奪った。

勝手に開いた、一番後ろのページに、ペンを走らせる。さつさと書き終えたかと思えば、放り投げるようにリリイに返した。

「連絡先だ。はした金チラつかせやがったからブツ殺すぞ」

捨てぜりふのように言って、エイトは車を離れた。スティアが「よろしくお願いしまーす」と声をかけても、聞こえないふりをして離れていく。

その姿が雑踏に紛れた頃、ようやくリリイは気を抜いた。はーっと長い息をついて、助手席にへたりこむ。

「疲れたの？」

「疲れるよ……」

どこまでも軽い口調のスティアに、恨みがましい視線だけは投げた。

「あんな怖そうな人、挑発するんだもの」

「いい人そうだったじゃん。ちよつと乗せただけでベラベラ語ってさ」

賞賛か揶揄かきわどい言葉を並べながら、スティアは機嫌よく通信機を操作していた。

「さっきのメモ貸して。登録しとく」

「本当にあの人を雇う機会なんかあるの？ レイバたちがバックアップしてくれるって言ってたのに」

「ギルドから離れた人脈も作っておかないとね。いざって時のために」

「……スティア」

「なに？」

「さっきから『ギルド』ってなに？ ガードとクライアントを仲介してくれる施設のことともギルドって言うけど、それとは違うよね」

ああ、とスティアは納得して、説明をくれた。

「テンプルが言う『ギルド』は、たいてい〈裏ガード〉と依頼人を仲介する施設のこと。非合法であるという一点を除いて、機能は普通のギルドとあまり変わらない」

リリィはあんぐりと口を開けてしまった。

「俺たちの旅を直接バックアップしてくれてるのも、レイバの所属する技術開発局と並んで、このギルドに当たるんだと思うよ。運営してるのは実質的にはテンプル。もちろん秘密でこっそりと、でも全国的な規模で展開してる。ライセンスの発行はできないけど、身分証明書の偽造とか、街の出入りの仲介とか、いろいろやってる。カンパニー側も、ある程度は黙認してる所があるね。人に言えない流通が完全に静止したら、経済的にも不都合が多いから」

「……ちよつと待って。裏ガードって言うのは、不正に入手したライセンスで、違法にガードをする人のことだよな」

「そう。今のあんたみたいなモグリを指す」

「寺院〈テンプル〉が、犯罪を支援してるの？」

スティアは、鼻で笑った。

「災害孤児を人体実験のために囲い込むような組織だし、こんな悪事は序の口だと思うよ。お布施だけで工面できるような金の使い方してないし」

ロールを目で指しながら、彼は自分の右手をリリィに見せ示した。長袖のジャケットに、皮の手袋。

「むしろ『寺院』が事業のひとつ、『技術開発局』が事業の一つ、『裏ガード』が事業のひとつ……っていう、でっかいグループ会社だと思った方がいいと思う。俺が知る限り、あそこで働いてる奴は、みんな俗人だよ」

煉瓦を敷き詰めた歩道を、人々が行き交っている。

リリイは何度も瞬きをしたくなかった。色とりどりの布地。まるで祭りのために飾られた娘のような、ふんわりとしたスカートを穿いている女性がたくさんいる。明らかに実用性にはとぼしい華奢なサンドルも、何度も見た。

着飾った人間がごく自然に集っていることが、信じられなかった。富豪が金品で身を固めている様子とは、また雰囲気が違う。当たり前のように、安価そうなものも高価そうなものも、種類が多いのだ。「服屋が多いんだよ。この街の南にでかい製糸工場があって、ブランドもいくらか固まってる。聞きかじりだけだね」

通行人にひたすら目移りしていたら、隣を歩いていたスティアにそう言われた。

市営の駐車場に車を置いて、宿を探すために歩くことにしたのだが、どうしても視線がさまよってしまう。街の景色がそのものが、リリイにとって新鮮だった。

「氣候がいいからね。もともとは綿花を中心に、いろいろなものを供給していた農村だったって言われてる。今ではすっかり、サウスグラウンドで一番でかい都会になっちゃってるけど」

「農村？」

イメージと結びつかない単語を反芻しながら、リリイは都会的な町並みと、遠くに見える高いビルを見上げた。スティアは苦笑する。「ごめん、今のは正確じゃないな。ここは街の北部だけど、南の方は生産地帯になってるんだ。もともとは二つの町だったのが、境界線をつぶして合体したってのが近いかな。『情報都市』なんて妙な名前で呼ばれてるのは、北に観光客を呼び寄せるための宣伝文句だよ」

「……なんで『情報』？」

「今のこの街には、ラジオ局とかでつかい出版社が多く集まっているし、通信ビジネスの会社も集中してる。マスコミとの距離が近いから、著名人とかが長期滞在するケースも多いらしい。金さえあれば、住みやすい場所だしね」

「そうじゃなくて、農村と服飾と情報って、なんだかイメージがつかないんだけど……」

訊くと、スティアは少し考えてから言い直した。

「歴史的に見れば、『かつては』大規模な耕作地帯だった。中世の貴族は、帝国を中心に北大陸の街に固まっていたから、このあたりでは貧民や農民が、田畑や家畜と一緒に暮らしていたらしい。帝国が倒れて市民に権力が戻ったあたりで、農村に寄り添うように市場ができた。それがこの街の中心部の原型。南の〈生産区〉が、農村の原型かな」

「でもなんか、不思議。港でもないのにそんなに発展したんだ」

「その頃は、土地だけやたらあったけど、特筆されるほどの都会じゃなかった。急発展した契機は、デカルトの遺跡が解析されていたことかな。今でこそ機械文明はいぶ汎用化が進んだけど、当時は見よう見まねだったから、大陸のどこでも自由自在に扱える、とはいかなかった。業者はデカルトで競い合うように研究を進めつつも、それを商売の軌道に乗せるために、腰を落着ける場所を必要としてたんだ。で、デカルトと距離が近く、機械の原料を仕入れられる港町フーコーからそれほど遠くもなく、かつ耕作地帯としての基盤があり、土地が余ってたユング北部に白羽の矢が立ったわけさ。デカルトだと遺跡が邪魔で、都市開発も上手く行かないからね」

言われてみれば、この街の景色は、数日前まで暮らしていたデカルト・シティに比べて、近代的で洗練されている印象を受ける。

「で、南の耕作地帯と市場街、北の機械工場とビジネス街、それが徐々に近づいて、今のユングの原型ができていく。急発展の決定打になったのは、そのさらに後だ。七年前に、カンパニーが〈シェルトア〉を設置したことで、街と街が隔絶される。多くの街は弱体化

して治安が傾いたけど、このユングは強かった。自給自足ができるからね」

リリイは、デカルトの食料店を思い出した。子供の頃によく食べていた北方産の果物は、今は市場に流れることが滅多にない。たまに見かけても、値段がひどく高騰している。産地から送り届けることが困難だからだ。

「政府はそれを考慮して、南部も北部もまるごとひとつのシェルターで包んだ。たぶん大陸最大のデカさだから、実験的な措置でもあったんだと思う。結果は成功。さすがに完全にはいかないけど、ある程度の自給自足ができる、役割分担可能な都市として成立する。それをラジオやら雑誌やらで宣伝すれば、金がある奴は、喜んでここに移住してくるよ。つまり、経済を回す力がある奴が、どんどん増える。結果として今の形に落ち着いたんじゃないかな」

「南北で機能を分けて、街を支えているってこと？」

「だいたいそんな感じ。その間、つまり中心部は、旅人や若者でにぎわう繁華街になってると思う」

「行ったことがあるの？」

「いや。俺もロールも、この街に来たのは初めて。ガイルさんと旅をしていた頃は、ほとんどノースグラウンドを回ってたから。今までの話は雑誌や新聞の引用。『住みたい街ランキング』で、不動の全国一位だよ」

リリイはふと、視線を右にずらした。隣の道路側を歩くスティアと反対側、つまり建物や路地の方向に、動くものを見た。

黒猫が、するりと滑らかな動作で、大通りから路地に向かって歩いていった。思わず、足を止めて見つめてしまう。

路地裏はがらんとしていた。デカルトでは、家をなくした人間や、どう見てもまっとうでない商売を営む人間が、大通りから少し離れた場所にたくさんいたが、ここに人の気配はなかった。ごみすら、数が少ない。

「どうしたの？」

リリイが止まっていたことに気づいて、スティアもまた足を止めていた。

「いや……」

呆けてしまって、言葉がうまく出なかった。

「猫がいたの。大人しい動物なんて、久しぶりに見た」

天変地異を皮切りに、大陸中の獣が突然の凶暴化を遂げたのは人類にとって差し迫った現実だが、凶暴化の定義や範囲は、明確な定義付けがされていない。地域や種別で、不規則にばらつきがあるからだ。現状、学者が必死に研究をしているらしいが、一般人に証されている情報は限りなく少ない。

だが、分かっていることもある。〈シェルター〉の壁で囲った内部にいる動物は、凶暴化の深度が低いと言われている。実際に、街の外の肉食獣の凶悪さに比べて、町中で見かける犬や猫の暴走は程度の低いものだった。愛玩動物や家畜と共に生きてきた人間に、与えた傷は限りなく深いが……

とにかく、街の中にいる限り、〈狂獣〉と呼ばれるバーサク状態の獣にお目にかかることは滅多にない。

それにしても、デカルト・シティで野良猫や飼い猫を見たことなど久しくなかった。動物に対する恐怖心を募らせた人間が迫害したのか、差別をおそれた飼い主が家の中に閉じこめていたのか、リリイは知らないが。

「土地が広いと、それだけシェルターもでかいしね」

スティアが隣で路地裏を覗きながら言う。もう、猫の姿は影も形もなかった。建物の隙間でもすり抜けていったらしい。

「例外はあるけど、森から離れれば離れるほど、動物の凶暴化の深度は低くなる。ペットだって絶滅したわけじゃないし、たぶんこの街には多いんだろうな」

「だったら、家畜も育てやすいのかな」

リリイは思いつきで口にして、すぐに気づいて付け足した。「もしかして、ネズミの被害も少ない？」

「さあね。たぶん、そうだと思うけど。根拠はない」

「どうして、森から離れると動物の症状が軽くなるのかな。今さらだけど。だって、獣が凶暴化した原因って……」

言いかけて、リリイは言葉を止めた。すぐ後ろで、ロールがきょとんとしている。

スティアは笑った。

「別に、〈ブラック〉を中心に、同心円上にアニマが出てるわけじゃないよ」

あえて、だろうか。いつもと変わらない表情で、きっぱりと告げる。

「でも確かに、痛いところを突いてるよ。〈ブラック〉の出現と、この大陸全体のアニマの増量の因果関係については、曖昧なことも多いんだ。狂獣が確かにロールの存在によって影響を受けてることは、レイバがデカルトで何度も証明してるんだけどね。森の発生と照らし合わせると、分らないことが多すぎる」

話題の中心になりながら、ロールには気分を害した様子もない。なにも言わない。

この兄妹のこういう所には、慣れるのに時間がかかるかもしれないけど、リリイは思う。

「〈グランド〉や〈セカンド〉と呼応しているとしたら思えないタイミングで、様々な事件や変化が起きているけど、その全てをロールのせい、で片づけるには事態が複雑なんだ。」 鉄道レールの大規模破碎”なんてのは、最たる例だ」

鉄道。

スティアが口にしたのは、大陸の混乱をさらにひっかき回した大きな事件のひとつだ。未だに決着がつかず、市民の心に大きな不安を与えている。

スティアは、軽く肩をすくめた。

「いろんなことが起きてて、たぶん、それぞれに様々な原因とか理由がある。それが〈グランド〉を契機に、一斉に起きてしまったか

ら、絡み合って複雑なことになってるんだらうね」

おどけるような仕草だったが、表情はごく真剣だった。

「この旅の目的はカラストーンを回収することだけど、片手間にできる範囲で、俺個人としてはいろいろ調べてみるつもり。全部うちの妹のせいになれちゃ、たまらないからね」

獣の凶暴化。

森の活性化。

鉄道レールの大規模破碎。

そのすべての発生時期に起きた、二度に渡る大規模な『天災』。

——それも、原因不明の『爆発』。

八年前から立て続けに起こった変化は、並べてしまうといっそう曖昧で要領を得ないことばかりだった。

政府は、調査と研究を行っているの一点張りだが、具体的な情報
はほとんど開示されない。弱体化した議会は威光を失っている状態
にあり、一般人の間では、〈グランド〉の爆発が、政府機関おかの
えの工場や研究所で起きた、人為的な事故ではないかという見解が、
有力な説のひとつとして数えられていたりもするのだ。ハウアーの
施設で秘密裏に研究していた有毒物質が、爆発事故により漏洩し、
それが獣の理性を奪って変質させたのでは、と。

その説が、政治を揺るがす口実となるほどには強まらないのは、
なにも証拠がないからというだけではない。人間が誰一人、狂暴化
の発症を呈していないからだ。すべてを科学のせいだと断定するに
は、不自然な例外が多すぎる。

最初の天災〈グランドクロス〉は都市で起きた。爆心地であるハ
ウアー・タウンの住民の生き残りから、獣と同じような身体能力の
増幅や、理性の麻痺、瞳の色の混濁といった変質が見つかったとい
う報告はない。ただの一件も。

森の発生は、さらに要領を得ない。

野生動物の狂暴化に伴う事件が増加したのとはほぼ同時期に、大陸じゅうの植物が不自然に成長を早めた。〈グランドクロス〉、〈セカンド・グランドクロス〉と段階を踏むごとに、これも狂獣と同じように激化する。

実際のところ、獣と森の双方と、〈グランド〉に因果関係があるのは間違いないと見られている。動物は森から離れ、シェルターの中で飼育すれば、野生のものに比べて凶暴化の深度が極端に小さくなるという実験結果が出ているからだ。

これらの異常事態について、スティアがデカルトで語った『正解』は、〈ヘアニマ〉の増幅だった。

——この大陸にはかつて、『魔法』があった。

歴史書の中には、古代に大陸を支配していた先住民が登場する。

〈森人〉と呼ばれる彼ら種族は、寺院テンプルに崇められて、今なお人類の思想に大きな影響を与えている。

彼らは日常の中で自然を操った。その能力は魔法と呼ばれる。同等の力を行使することは人間にはできず、発祥には謎が多いが、科学的解明でわかっていることもいくつかある。不可視の粒子ヘアニマが、その源であることが最たる例だ。

森人は絶滅して大陸から姿を消した。だが人に見えない粒子ヘアニマは恒常的にこの大陸と共にある。

そして、八年前に起きた〈グランドクロス〉は、大陸に漂うヘアニマの絶対量を劇的に増加させた。

一般人に知らされていない真実として、〈グランドクロス〉は一人の人間が引き起こした魔法による被害なのだ。その犯人とは他でもない、スティアの妹、ロール・アリビートであるという。

ごく普通の両親から、ごく普通に生まれたという彼女は、生まれつきその体に、ある大きな力を封印されていた。森人がこの世に残し消せずにいた、無限のアニマの塊と称される生物兵器ヘブラック。魔法使いとしての訓練を受けていないロールに、その膨大な力を制御することはできない。何かのきっかけで自制を失えば、街を

吹き飛ばす規模の爆発を起こすことも十分に可能だという。

自身の力の自覚と共に、彼女の左目の眼球は、生来の色を無視して漆黒に変わった。そして、その漆黒の目は、あらゆる生物を本能的に畏怖させる。――無限のアニマの塊である〈ブラック〉の覚醒と同時に、大陸中のアニマが呼応するように増量し、それが獣の理性を狂わせ、森を無作為に繁殖させる結果につながったのだと、スティアは語った。だから、彼女の近くにいる限りは、獣は彼女を恐れて近寄ることすらもできないのだと。

スティアは、ロールの左目を元に戻すために、必要なあるものを探している。リリィはその旅路に、ボディ・ガードとして雇われた。この街に来たのも、その目的のためだ。情報都市ユングのどこかに、スティアが探す〈カラーストーン〉がある。

宿は三軒目で空室をふたつ見つけた。ざっと見たところ、高級ホテルにはほど遠いが底辺の安宿というほどでもない。スティアは受付カウンターで金を払って署名をした。ガイル・ブルーノと。

ロビーで待たせていたリリィとロールのもとに戻って、受け取ったばかりの鍵を渡す。

「とりあえず、今日は休もう」

番号を確認するリリィに向けて、スティア自身が持っている鍵もチラリと見せた。隣の部屋だ。

「これからのスケジュールについては明日の朝に話し合いたい。こんなちゃんとした個室で休めるの久しぶりだし、今日はもういいよね。食事はそうだな、悪いけど各自で」

「え？ ……いや、うん。分かった」

リリィはなぜか一瞬だけ戸惑ったが、それ以降は何も言わなかった。

部屋は三階だった。荷物を抱えながら階段を昇るのは死ぬほどしんどかったが、もうすぐ休息だと思えば耐えられないものではない。リリィが「荷物持とうか？」などと善意で言ってはくれたが、丁重に断った。いつまでも、こんな風に老人を見るような目で見られ続けるわけにはいかないだろう。

リリィとロールは同室だ。自分の部屋に入る直前に、スティアはふたりに笑いかけた。特に意味などない、いつもの笑顔。条件反射的に浮かぶ、普通の笑顔。

「そんじゃ、おやすみ」

ガチャリとドアノブを開いて、そして後ろ手に閉じた。

荷物をドサリと床に置いた。

深く、息をつく。

のたりと重い足取りで部屋の奥に進む。細くなっていた通路が開

ける。窓に寄り添うようにベッドがあった。足を止めずに、そこまで歩いて――倒れ込んだ。

安いスプリングに全体重が衝突する。自分が大男だったらかなりの負荷だっただろうが、幸いにして快く受け止めてはもらえた。きちんと乾いた掛け布団の感触を顔面で味わいながら、ステイアは脱力した。鏡など見えようはずもないが、きつと一瞬前とは正反対の、ひどい顔をしているに違いなかった。

（つかれた……）

全身がぐったりとして四肢はまるで棒のようだった。車の後部座席にただ座っているだけだったのに、ひどく腰が痛い。

それほど大きなトラブルもなくユングに辿りついたにも関わらず、ここまで疲労するとは思っていなかった。

（基礎トレくらいはするようにしてただけだな、デカルトでも……）

そのまま寝そうになっている自分に気づき、慌てて耳を引っ張った。あけて間もないピアスに違和感を感じて、すぐに手を離す。むりやり身体を起こした。寝てしまったら朝まで目覚めないに違いなかった。

しばらくそのままの体勢で、立ちくらみが通り過ぎるのを待つ。

……待ちながら、考えた。個室に一人きりというこの状況がとても珍しい。寺院では科学者の監視があった。そうでない場所ではロールが隣にいた。

「いいなこれ……」

思わず、口に出して呟いてしまう。「いいな」

どんなに無様にに脱力しても、それを見られることがない。

宿についてからすべきことはたくさんあったが、まずはとにかく身体を洗いたいと、想像していたよりは清潔そうな布団に触れて強く思う。汗や汚れで髪も肌もベタベタする。ロッジで荷物から目を離すのはぞっとしないので、ずっと満足に汗を流していない。風呂に入って、そのままベッドで寝ることができたらどんなに快適だろう

うか。――町に滞在した時間が長すぎた。この程度の不快にまだ慣れない。

だが、風呂場は確か一階にある。真夜中までは開いていないはずだ。共同の浴場を利用するには不都合が多すぎる。三年前とは違って、今は人前で服を脱ぐわけにはいかなかった。

（年頃の女かよ）

自分に向けて毒づきながら、立ちあがった。

ドアの近くに放ってしまった荷物を引きずるように回収した。そして、改めて部屋全体を見回す。入口からベッドがある場所までの通路が狭いのは、もう一つ小部屋があるからだと気がついた。覗くと、水道と鏡と洗面台と、トイレがある。思わず、口笛を吹きそうになった。個室にしつらえられているとは思わなかった。そう言えれば、近くに川があった。南部は農作地帯であるというし、この街にいる限り水源の心配は必要がなさそうだ。

フロントから水とバケツを借りてくる手間が省けた。飲料水は売店か何かで買う必要があるだろうが。

ステイアは荷物を置いて、つけっぱなしにしていた手袋を外した。ジャケットを脱いだ。中に着ていた長袖のシャツも脱いだ。骨に表皮だけが貼りついたような肉体を見下ろした。――右肩から先にはその二つすらもない。

右腕は、無骨な鉄色の義肢だった。

重さを限界まで削ったおかげで、もとの肉体と同じくらいに頼らない。両腕を見下ろして、そのギャップに嘆息する。右腕の関節を動かしてみた。連結している肩口と合わせても、違和感も不具合もない。

右手の甲、中指の付け根のあたりに、親指の爪ほどのランプがある。今は消灯されているが、明かりが点れば宝石のように輝くことをよく知っている。

（めんどくさ）

愚痴のような言葉が胸中にこぼれる。言っても仕方がないことは

言わない主義だったが、口に出さない範囲はその限りではない。

（秘密を抱えながら普通に生きるってのは）

旅に出る、つまり〈教区〉から出るというのは、こういうことだ。鞆からタオルを二枚引っ張り出す。服を脱ぎ捨てたまま小部屋の洗面台に向かった。紐を引いて電灯をとると、鏡に自分の姿が映る。地下室に閉じ込められていた時間を反映して、肌が不自然なまでに白い。これはそのうち改善されるだろうが、肋骨が木琴じみて浮いているのは、きっと、ずっとこのままだろう。

改めて、まじまじと己の身体を見つめる。毎日の体重測定から解放されたのは嬉しくあったが、数値が正確に把握できないのは怖くもあった。二年前から数えて何キロ減ったかを考えると、そのうち消滅してしまうのではと思わずにはいられない。痩せた、という言葉葉を通り越して、しぼんだ。身体の形がまったく変わってしまったような気がした。

これ以上身長は伸びないだろうと、ずっと前、レイバに言われたことがある。それに落胆したのも遠い記憶だ。贅沢な悩みだった。生まれつきの病人みたいに、明らかに室内で生きてきた者の弱り方をしているのに、大きな傷跡だけは無駄にたくさんあった。わき腹から背中にかけて残っている、火傷の痕。左肘から手首に向かって伸びる、大きな切り傷。

どうしても災害で受けた大怪我ばかり目立つが、ガイルと旅をしている間に負った、小さな傷もいくつもある。

人生の縮図だ、と思った。

不運で、無鉄砲で、不器用で、怠惰で。

——無様だ。

水道の蛇口をひねった。左手を突っ込んで水の温度を確かめる。すぐに顔を洗った。持ってきたタオルで適当に拭く。

もう一枚のタオルを水で濡らした。軽くしぼって、首筋を拭く。そのまま全身を拭いていった。思っていたよりはさっぱりとした。

髪くらいは洗おう。あとはピアスの消毒と、〈キャロル〉の整備

だ。洗濯は明日でもいい。この宿に滞在するかは別問題だが、しばらくはこの街に留まるに違いないのだから。

風呂上がりのさっぱりとした体で、用意された食事をとって、片づけもしなくていい。

それ以外のこと慌ただしくても、この瞬間だけは旅路の醍醐味だと思った。

リリィはロールと向かい合って食事をとっていた。小さな宿の小規模な食堂。調理された温かい食べ物を口にして、つい笑いそうになる。疲れた体が、こんなに素敵なものを迎合しない道理がない。

ロールもまた、実に楽しそうな顔で、テーブルに並べた食事をぱくぱくと放り込む。一人で、二人前の定食を食べていた。彼女が自ら注文したのだ。

小柄な体にあまりに不釣り合いな食分量。リリィはまだ慣れずに、じっと見つめてしまった。成長期と言えば、その通りだろうが……。

「本当、よく食べるね」

思わず口にする、ロールは咀嚼をしながらにっこりと笑った。

「それだけ食べても太らないんだもんなあ。羨ましいや」

「うん、太らないですねえ」

相変わらずの敬語で、彼女は気楽に答えた。

「もうちょっと、太ってくれてもいいんだけど……」

つぶやきながら、彼女は自分の体を見下ろした。主に胸元を見つめているようにみえて、リリィは苦笑した。自分が十四歳の頃を思い出した。ずいぶん昔のことみたいだ。

三年前。

〈セカンド・グランドクロス〉と同じ頃かと、思い直した。当時

の自分が、ロールと同じ歳。つまりリリイと同じ歳であるスティアも、科学実験に身を捧げるのを決めたのは、このくらいの頃だった。リリイは、目の前にあるロールの姿と、昔の自分を重ねた。成長期を経てずいぶんと体が変わった。身長も伸びたし、体重も増えたと、脂肪と筋肉と骨の比率も確実に変わった。成人体に近づくように。

スティアは、三年前に比べて衰弱したと言っていた。

三歳年下の彼の妹を見つめてみると、その言葉の意味が生々しく感じられる。

(……大丈夫かな)

三階で休んでいるであろう彼のことが頭をよぎる。ちゃんと菓を飲んでいるだろうか？ 体を休めているだろうか？

心配しすぎだと自分で思う反面、彼は変な所で抜けているから、懸念もやまない。明日の朝だって起きられるのかどうか。

ため息をつきたくなった。デカルトを発ってからというもの、リリイはある不安を抱いていた。

さっさと部屋にこもってしまったスティアの様子を思い出す。そして、デカルトと一緒に過ごしていた同級生との距離感を思い出した。仕事で行動しているのだから、友人同士の戯れと同じものを求めるのは愚かだとは分かっている。だけどあまりにも全てが違った。きつと今は、空いた時間に隣の部屋を理由なく尋ね、雑談で盛り上がるような状況ではないのだろう。それに慣れない。

スティアはよく笑う。話しかければ言葉を返してくれるし、むしろあちらから話しかけてくる方が多いくらいにはお喋りでもある。だけど、どこか距離を置かれている気がする。それが顕著に現れてしまうのが、こうした「仕事じゃない時間」だ。必要じゃない会話を切り上げて、個別行動をとろうとすることが多い。

ただ、もしかしたら本当にどうしようもないほど疲れていて、会話などより休息を必要としているのかもしれない。リリイ側から図々しく押し入るのは気が引けた。となると、お互い様なのだろうか

……。

ここに来るまでだって、慣れないことは多かった。スティアは一
度たりともリリィに不満をぶつけなかったが、たまに、当然のよう
にドライなものの言いをするのが気になった。

ガイルっぽい男をガードにつければよかった？

攻める意味では、リリィに大それた期待をしていない？

（嫌われてるのかな……）

と、思ってしまうのはたぶん、自意識過剰なのだろうが。

分かってはいても不安になる。スティアは同行者を選ぶにあたっ
て「きちんと仕事ができる人間なら誰でもいい」と言っていた。

つまり自分は合格だと言うことだ。そして、自分じゃなくてもい
いと言うこと。

仕事に理想を求めすぎでは危険だと、シモン教官に聞いたことが
ある。本当になりたい自分には、すぐになれるものではないと。

だけど、それは少しだけ切ない。

（せめて、ご飯と一緒に食べられればなあ）

避けられている錯覚があるから不安なのに、共に食事をとれない
となると、会う口実もない。

スティアは普通の食事がとれない。

菓子でも食べるように栄養剤を放り、一日の始まりに『定着剤』
で気付けをする。

それだけで生きていける裏付けがある。そうして生きていく理由
がある。結果が、あの痩せぎすな体だ。

リリィは想像しようとする。自分が食事なしで生きていけるよう
になったらどうなるだろう。——分からない。空腹に耐えかねて喉
をかきむしる様を思い浮かべるのがせいぜいだった。食事を”必要
としない”とはどういう感覚なのだろう。

体を思い切り動かした時などは、ご飯を食べるのが何よりの楽し
みだ。疲れた時は甘いものが欲しい。ぼうつとする時はしょっぱい
ものが欲しい。焼いた肉の歯ごたえと風味を想像するだけで、幸せ

な気持ちになる。そんなことは理屈じゃない。

それがすべてなくなることは、言葉で語り尽くせないほど、恐ろしいことである気がしてしまう。気持ちを切り替える手段が、確実にひとつ消えてしまう。

「リリィさん」

声をかけられて、我に返った。

ロールが、空になった平皿を手にとって、にっこりと笑う。

「おかわり、行ってきます」

啞然とするリリィを後目に、ロールは席を立つ。パンの追加は有料だったはずだが、まったくためらう様子がない。

厨房カウンターに歩み寄るロールを見つめて、この半分、いや三分の一の栄養でも兄に渡らないだろうかと思った。きっと、一口でも何か、食べ物らしい食べ物を口に含む様を見ることができれば、こちらとしても安心できるのだろうか……

自分の皿に目を落とした。冷めて堅くなったパンをちぎって噛む。小麦の香りが広がった。質素だが間違いなく美味だった。

書物の数ページの、角に折り目がついていた。

一度そちらに着目してしまえば、活字の内容が頭に入ってこなくなる。……本当に疲れているなと思った。

スティアは、読んでいた本にしおりを挟んで閉じた。ベッドに寝転がったまま、顔の脇にどける。分厚い背表紙に書かれたタイトルが改めて目に入った。――「森人創世記」。

本からはしおりだけではなく、いくつもの付箋が飛び出している。格闘した時間はずいぶん長い。レイバの研究室から勝手に物色して、身体検査の合間に読んでいた。役に立ちそうだったから、勝手に旅

にまで連れてきてしまった。

盗んだことにはカケラの後悔もない。どうせレイバの書棚から数冊本がなくなった所で誰も気づかないし、気づかれた所でどうでもいい。荷物の奥には、ほかにも厳選した数冊が積まれている。「ストーン理論」「神話と星座」「アニメとたどる科学史」……。

数字や記号の羅列である専門書の類は、どうせ開いた所で分らない。よって、自分でも読めたもの、だが常識以上の知識を網羅している良書を、長い実験生活の中で厳選した。だが少し欲張りすぎた気もする。車で移動している時は痛くも痒くもないが、ここまで移動する際に、肩にひどく負担がかかった。紙の重さを甘くみていた。

眠さに視界がぼやけてくる。こうなると長くは起きていられない。変な体勢になっていないかを意識しながら、結局は姿勢を直すことも億劫になった。

「森人創世記」の表紙の色は、黄土のような鈍い黄色だった。古本なのか、独特の香りを放つページ一枚一枚も、どこか黄味がかっている。

(……イエロー)

眠りに落ちる寸前で、指先が本の表紙を撫でた。

(なにができるんだろ……黄色って)

右手の義肢が、キラリと光る。スティアの意志に答えて、手の甲に設置されたランプは鮮やかな黄色の光を発していた。

黄ばんだ紙、黄土色の表紙……よくみるとこれも黄みがかっている天井……紙、土、建物。

頭が回らない。

スティアは仰向けになって、額に右手の甲をあてた。検温のような仕草。目を閉じる。

たたんだばかりの右手を伸ばして、寝る体勢に放り出した。

手の甲に、一瞬だけきらりと違う色が光る。

鮮やかな赤。

（ヘレッド）がいいな……シンプルで）

赤は熱。しごく、単純な想像。

単純な想像は、疑う要素がないゆえに強固なものになる。

スティアはそのまま、ころりと眠ってしまった。鍵とカーテンは閉めた。電灯の光だけは、つけっぱなしのまま輝いていた。

スティア・アリビートは、夜中には目覚めない。

レイバがそう言った。実際、ここ数年はずっとそうだった。眠りに落ちたら最後、周りが騒いでいようが、地震が起きようが嵐が来ようが、絶対的な睡魔に屈服し、起きることがない。朝に起床することすらもやっとなこの身体は、夜中に起こされた所で反応のしようがないほど、深く眠ってしまっている。らしい。

だがここにきてようやく、例外が発生した。――その夜スティアは、首を絞められて目が醒めた。

仰向けに反った無防備な喉元に、爪が食い込んだ。状況を読みとるより先に視界が回転する。動転に見開いた寝起きの目に、ぼんやりと映る逆光の影。

悲鳴をあげることではできなかった。舌が飛び出るほど強く気管を圧迫される。苦しさにあらがって、かきむしるように手が動いた。首に絡んでいる、誰のものともされない手首に、思い切り爪を立てる。

驚くほど細かった。少なくとも、男のものではない。

冷静に分析できたのはそれだけだった。

寝台に転がっていた身体を押しつぶすように、相手の体重がのし掛かってくる。大きく開いた口から、かすれた空気と液体が漏れる。身体が戦慄く。口元がべたついた。視界が、揺れる。

スティアは敵の手首を潰れるほど握りしめた。そしてその瞬間、機械で出来た右手の甲が赤く光る。

頭の中で絶叫する。――離せ。離せ離せはなせはなせ――！
光。

女の絶叫が、部屋に響きわたった。焦げくさい臭いが鼻を突く。襲撃者はスティアの身体を持ち上げるように身をよじった後、あっさりと手を離れた。

解放されたスティアはベッドに落ちた。せき込んで口元を押さえると、涙と唾で顔面がぐしゃぐしゃだった。

びりびりする喉を左手で押さえながら、なんとか前を見た。涙で濡れたぼやけた視界の中心に、他人の姿を捕らえる。

まったく見知らぬ女が、ベッドの上にいた。

左の手首の周辺を押さえて、苦痛に耐えている。その姿に見覚えはない。

髪は短かった。顔のラインにそって削いだような切り口をしている。フェイスラインシャギー、と言えいいのか？　つけっぱなしにしていた電灯の下で、胡桃色のそれがつややかに光っていた。

服装はTシャツにショートパンツ。町を歩けばどこにでもいそうな出で立ちだが、惜しみなくさらけ出された長い手足は、アスリートのように無駄がない。細身で筋肉質だ。体勢の都合で今は分かりづらいが、たぶん身長もかなり高い。

だが、警戒できる要素とえばそれだけだった。武器を持っている様子がない。防具すらもつけているようには見えない。

顔すらも丸だした。身を守る気も、正体を隠す気もまったくないのでろうか。いや……

苦しんでいた彼女の動きが落ち着いて、視線がこちらの顔に定められる。

瞳。

驚くほどの鋭さでもって、目と目が合う。まっすぐに、瞳だけを睨まれる。

スティアもまた、目が離せなかった。目の前の女性の瞳は灰色だった。ただのグレイじゃない。生まれつきのものとは思えない、病気のような不自然さで混濁しているのだ。――見たことがある。それも何度も。

（バカな）

感情を整頓する暇は与えられなかった。苦痛に見切りをつけた女が、こちらに視線を固定させたまま再び動く。焦げ臭いにおいをさ

せた左手は使わず、右手を思い切り後ろに下げて、その反動で拳を飛ばす。次の瞬間には突き飛ばされていた。

硬い衝撃が頭蓋骨と鼓膜に強烈に響いた。枕ではなく壁に受け止められて、ベッドにずり落ちる。

動けないでいると、女の右手が左肩を力ずくで押さえ込んだ。そこを支点に、尻が腹の上に乗る。膨れ上がった殺気が、灰色の目が、まっすぐに瞳を見下ろしている。

対するスティアは、頭も身体もうまく動かない。状況を把握しようと思いが、端からばやけていくようだった。定着剤が必要だ。漠然と、それだけは理解した。

「――スティア！」

ドアが激しくノックされた。

異常を察知したリリィが、隣からやってきたのだろう。だがドアは開かない。――返事を待っているのではない。がちやがちやと音がする。きちんと施錠をしてから眠りについた己の用心深さを、この時ばかりは心底呪った。

女の背後で、カーテンが揺れているのが見えた。彼女は窓から入ってきたのだろうか。こちらにも、鍵はかけたのに？ 三階から？

「お兄ちゃん！」

妹の声がした。その一瞬。

目の前の女の動きが、確かに止まった。

計算された動きではなかった。恐怖を感じた人間が、反射で硬直したようだった。

その一瞬の隙を見落とさない程度には、こちらの感覚もマシンになっていたらしい。

スティアは、手元にあった固いもの、ベッドの上に置きっぱなしにしていた本を掴んで、思い切り振りあげた。分厚い紙で装飾された専門書の角が、彼女の額に食い込む。――目元に近い位置を狙った。うまくいった。彼女はバランスを崩して目を閉じた。全身に残された力をすべて使って、上半身のバネを限界まで動かす。押し倒

された体勢をひっくり返すべく、反動をつけた。右手を振りおろして本を投げ捨てた。

勢いのまま義手の手のひらを広げて、女性の腕を思い切りつかむ。今度は、先ほどのような一瞬では離さなかった。金属で出来た指がつかんだ肉が、じゅわあ、と音を立てた。脂の焼ける臭いが広がる。同時に、女がつんざくような悲鳴をあげる。皮膚が溶解するような手応え。

スティアはやはり右手を使って、彼女の身体を完全に振り払った。ぐらりと立ちくらみがするが何とかそれは無視して、ベッドから飛び降りる。

平衡感覚がかなり怪しかったが、振り返らずに部屋の出口に走った。狭い部屋であったこともまた幸いして、すぐに開錠に成功する。ドアが開いた。同時に、リリィが飛び込んできた。部屋着姿だが、鉄製の短いロッドを携えていた。

彼女は衰弱したスティアの体を受け止め、一瞬だけひるんだようだが、すぐに表情を毅然と整えた。肩越しに部屋の奥を見つめる。

「ロール、お願い！」

リリィはスティアの横をすり抜けて、襲撃者の方に走って牽制に向かった。膝からくずおれたスティアの肩を、廊下の方にいたらしい妹の小さな手が受け止めた。

妹がどんな格好でいるか、どんな表情でいるかなどを気にする余裕は、もはやなかった。傷の痛みと睡魔が混ざって、くらくらする。

「あ、ちよっと！ 逃げ……！」

勇ましかったリリィの声が、すぐに裏返る。

何とか視線だけ振り返ったその瞬間に、例の女が窓から身を踊らせるのが確かに見えた。

三階建ての建物から、星空に向かって、鮮やかに。

リリィがベッドに膝を乗せて窓にかじりつく。外の様子はここからでは見えない。だが、呆然とする彼女の背中を見ていれば、状況はなんとなく想像がついた。――逃げられた。

ロールの腕に体重をあずけて、気が緩んだスティアは、今度こそぐったりとしてしまった。

肩を上下させて、酸素をむさぼるように吸い込んだ。握り潰された喉がひどく痛くて、すぐにむせた。

給湯室を借りてリリイが作ってくれた、ぬるい白湯をゆっくりと喉に流す。

喉を痛めたときには、冷たいものでも熱いものでもなく、常温より少し温かいくらいのが飲みやすいはずだと、彼女は主張した。実際、それは正解だったらしい。体温にほど近い液体が身体に与える負担は、ごく小さかった。

レイバの施す、無慈悲で冷酷な治療に慣れた身としては、新しい相棒の気遣いが、無性に泣けた。

「落ち着いた？」

母親のような口調で、リリイが言う。

襲撃を経て、しっちゃんかめっちゃかになってしまったベッドの近くに、彼女はいた。自分が側面に寄りかかっているのだから、当然だが。声を出すのはまだ辛かったので、スティアは力なく頷く。

実際、大した怪我でもなかったらしい。女の腕力であったことにプラスして、早い段階で火傷を与えることに成功したことが幸運だったのだろう。水を飲むことも、呼吸をすることもできる。

外側、つまり皮膚にはまだ違和感が残っていた。ロールがスティアの姿をまじまじと見た時の、第一声を思い出す。「うわあ」と言われた。締められた形に、首が鬱血してしまっているらしい。

リリイはじっとこちらを見ている。ロールは立ち上がって、開けっ放しの窓を気にしているようだ。

見知らぬ女は、もう、影も形もない。

「なんだったんだろう。今の……」

話題提供というわけではなく、心底畏怖した様子で、リリイが呟

く。

「ちょっとしか見えなかったけど、普通の女の人だったよね。なのに、三階から飛び降りてさ」

身振り手振りで説明したかったようだが、相手の動きが規格外だったせいだろうか、リリーのジェスチャーはわけのわからないものになっていた。

「壁のちょっとした段差に指をひっかけて、そのままピョーンって二階の窓枠につま先をひっかけて、次の一步でホテルを囲うコンクリート塀の上に降りて……そのまま、路地に飛んで曲がって消えた」口にするごとに、どんどん自分の発言に自信がなくなってきた様子だったが、なんとか最後まで説明を終えた。

「私、寝ぼけてるのかな」

「……そんなら、俺も盛大に寝ぼけてるな」

かすれた声でなんとかしゃべる。けほっと空咳をして、喉の調子を整えた。

リリーが心配そうに目をしょげさせるのを、手で制す。制せるものでもないだろうが。

「まあ、眠いのは否定しない……今も言ってるそばからよくわからない。でも、見たよ」

譫言のような声で、そう言うのが精一杯だった。近くにいるリリーの顔すらも、遠くなったり、近くなったりしている気がする。

こんな不測の事態にあっても、落ち着きを取り戻せば、身体は寝ようとするらしい。多少の法則は感情で凌駕するのが生物というもののだろうに、本当に、無様だ。

記憶が夢と混ざる前に、説明をしなければいけない。スティアは落ちそうになる臉を必死で開けて、リリーの方をじっと見た。

「薬、取って」

「薬……って」

「定着剤。その荷物に、ある。……いや、ベッドのサイドテーブルだっけな。そのへんかも」

「どうして」

「このままじゃ、寝る。喋れない。覚えてるうちに、俺が見たものを説明したい……」

睡魔は全ての感覚を麻痺させる。もういくばくも待たずして、眠りの誘惑に負けるだろう。そうなる前に、対策を練らなければいけない。

だが、リリイの表情が予想外に険しくなる。彼女は、咎めるような視線でこちらを見ながら、きゅっと唇を引き結んだ。

それほど無理な頼みをした覚えはなかった。意味が分からない。

リリイが、ゆっくりと口を開く。

「だめ」

「……な」

「寝ていいよ。明日でいい。また、説明して」

冗談じゃない。忘れるに決まっている。今ですら記憶が曖昧になりかけているのに。

リリイは有無を言わせない。ぬるま湯の入ったコップを奪って、スティアの腕を引っ張った。

無理にそうされれば、抵抗をするだけの元気などない。

視界がぐらりと揺れる。電灯の明かりが、小さくなったり、大きくなったりする。指先から感覚が痺れるようだった。

やばい。寝る。

いつの間にか、ベッドに寝かしつけられていた。

シーツのしわを伸ばそうとするリリイの指が見えた。先っぽを掴んで、注意を引く。

「……ポリスは呼ばないで」

リリイが、かすかに緊張したような気がした。

「狂獣の目をしてた。あの女……」

寝言のような言葉を必死に並べる。どうしようもなく瞼が重い。

「『身体能力の増幅』……」

自分の声が、夢かうつつかも、分からなくなる。

「でも、そんなことは、ありえない……」

眠りにつくまぎわに、リリィが目を見開いている顔を見た。その認識を最後に、意識はすんなりと闇に落ちた。

「へセカンド」が起きたきっかけは、ロールが極端に感情的になって、周りの破滅を願って、確信したからだろうな」

レイバの声を、思いだす。

「我を失って、やけくそになった人間の一時的な気持ちなんて、本人に御せるものじゃない。近しい人間が目の前で重傷を負い、それをしでかした犯人が、目の前にある。その理不尽の破滅を願えば、ああなる。だからこそ」

言葉をきってこちらの目を見つめたその顔つきも、覚えている。とても、楽しそうだった……。

「カンパニーの連中は、お前の命も、直接的に狙うことができないんじゃないかな。失ったらロールが傷を負うであろう全てのものに対して、奴らはどうしても保守的になる。一度、痛い目を見たからね」

にっこりと、唇が、屈託なくほころんだ。

「……だから、お前はその隙を突くような戦い方を覚えればいい」
必要なのは、力じゃない。

ガイルと正反対の提案をあげたこの男を、好意的に思ったことなど、一度もない。

はじめに目覚めたロール・アリビートは、髪を掻き揚げながら、くるまっていた毛布から身体を起こした。

一人部屋の狭い床に色々なものが並べて置かれていた。水が入ったコップ。黄土色の分厚い表紙に覆われた専門書。適当に転がった

数人分の荷物。その中には、自分が持ってきた鞆も含まれていた。それらに寄り添うように、もっさり、布団が丸く固まっている。そこから、よきと突き出る脚。

違う。床で眠っているリリイ。

目を、ぱちぱちと瞬かせる。

リリイは壁際にしゃがみこむ体勢で、布にくるまって眠っていた。折り畳まれた脚と顔だけがはみでている。手を伸ばせばすぐに届く位置に、武器を置いていた。

ロールはだんだんと、昨晚の出来事を思い出してきた。襲撃を受けた。――馴染みのない表現ではあるが、そう言う他にない。

確かりリイは、自分が見張りをする、とか言っていた気がするけど、寝てしまったらしい。

無理もないな、と思う。

のっそりと、立ち上がる。そこいらに転がっていた靴に足をつこんで、ぺたぺたと窓際に歩いた。壁にぴたりとくっついて、ベツドがある。上からのぞき込む。

兄が熟睡していた。

カーテンを開け放した窓から、朝日に照らされてなお、まったく目覚める様子はない。

ここ数年で見た兄の表情は、ほとんど寝顔だった気がする。寝顔じゃなければ、必要以上に友好的ないつもの作り笑顔か、レイバに向ける苛立ちや呆れか、そのどれかだ。

彼の表情は、ここ数年で、ずいぶん種類が減った気がする。

まるきり人のことは言えないという、自覚はあるが。

まあいいか、と思いつながら、ロールはスティアの肩を揺すった。身内に特有の遠慮のなさで、ゆっさゆっさと。

反応がまったくない。目覚めないどころか、抵抗すらない。いつものことだったので、特に不気味だとは思わなかった。さてどうしようか。レイバはいつも、特製の超音量目覚ましを活躍させていたようだが、旅に持ち込むことはスティアが拒んだ。こちらとしても、

わざわざ音を立てたくはない。

ああもう、めんどくさいし、なんでもいいや。

リリイが壁際に避けたらしい、すっかり常温に変化した昨日の水のコップを拾った。兄の顔面に向けて傾けて、水をかけてみた。

鼻息が水の侵入を拒んだことに始まり、不快感を露わに瞼がぎゅっと縮まる。見当はずれの方向に手を動かして振り払おうとするが、うまくいかくはずもない。やがて呼吸を求めて、無理矢理咳を出した。水滴が飛ぶ頃には、コップの水も尽きていた。

ひたすらゆっくりと、兄の左手が動いた。無言で、濡れた前髪に手をかきいれて、額から顔面を覆っていた。

二度寝するんじゃないかと思わせるほどに、長い沈黙挟んで、ようやくぽつりと、声が聞こえた。

「……なんか、恨みでもあんの」

「ないけど。こうした方が起きるかなって」

ロールはありのままにそう言った。

寝起きのスティアには、怒るだけの元気もないらしい。起きあがれないまま、ひたすら緩慢に、左手をあげて、あさっての方向を指さした。

「葉。と、なんか拭くやつ。……頼む」

はいはい、と荷物をあさり、ハンカチと定着剤と栄養剤を渡す。スクイズ式のボトルになっている方が定着剤だ。兄はなんとか半身を起こし、前髪からぼたぼたと水滴を垂らしながら顔を拭くと、葉を口に含んだ。

しばらく、瞬きを繰り返す。するとある一点で、劇的に目が冴える。いつものように、活動的な顔だちが戻ってくる。――なにやら、不機嫌な半眼だが。

首を動かして、こちらを見た。

「……ロール」

「なに？」

「この布団が、宿の備品だってことは分かってるよね」

「そうだけど。干せば乾くし」

「……………」

スティアは枕をぎゅっと押した。じゅわっと手に水が染みだしていた。苦い顔をしている。「もう二度とやるな」

濡れた髪を掻き分けながら、深くため息をついていた。そして、首を傾けた視線の先で、ようやく眠っているリリイを見つけたらしい。

「って、色々記憶が曖昧なんだけど。なんなのこの状況」

目が覚めて、すっかり口調が早くなっていた。いつものことだ。気にせず、告げる。

「一番、疲れてるかなーって」

「？」

「車いっぱい運転して、慣れない森を旅して、やっと人心地ついたと思ったら変な人が来て、変な人からお兄ちゃんを守るために夜中に起こされてすぐ戦って、いつ戻ってくるか分からないって、夜中の見張りも買って出て」

起こった事実をひたすら並べると、兄の顔が曇っていった。

「だったら、リリイよりお兄ちゃんを起こそうかな、て思ったの」

「……間違いだとは言わないよ」

うめきながら、スティアは髪を乱雑に拭いた。

「でもいつまでも寝かせておくわけにもいかないだろ。大体、床でこんな体勢じゃ、疲れもとれないだろうし」

それもこれも、自分がベッドを占領して、とっとと眠ったからだとは分かっているが――などと、兄の顔から自己嫌悪じみた心の声が聞こえてきた気がした。まあいいや、と思った。

「リリイ」

立ち上がった兄は、眠るリリイに近づいた。声をかけながら、指先だけで、布団の中の肩をそっと揺らす。

すぐにリリイは「うん……？」と反応をする。すごい差だなあと思った。

「あれ……私」

「朝。俺もロールに起こされた。あれから襲撃はなし。全員無事」
「襲撃」

リリイはその一節を反復して、ぱっと顔をあげた。

「そうだ。変な女の人に来て」

「そ。正直、相手の姿形とかの記憶は、かなりボケてきてるけどね」
「淡々と兄がそう言うのと、リリイはぎくりとしたようだった。」

スティアは、じっとリリイを見る。

「なんで昨日、薬を渡してくれなかったの？」

責める口調ではなかった。なんでもない風に聞いている。それが余計の迫力になっていることの自覚は、あるのかないのか。たぶん、あるのだろう。

リリイは寝起きの顔をこするふりをして、しばらく躊躇していた。だが、やがて顔をあげた。まっすぐにスティアを見て、口を開いた。

「……薬中患者みたいな目をしてたから」

兄の目が、ほんの僅かに開かれる。リリイは続けた。

「色々、理由はあるよ。定着剤の服用サイクルを狂わせるなどか、レイバにも言われてるし。だけど、そういうこと考えてる余裕はなかったから……反射的にかな。ダメだって思ったの」

まっすぐな瞳で、念を押す。

「今でも、間違った判断だとは思ってないよ」

「……………」

しばらく、二人は見つめ合っていた。やがて目を反らしたのは、スティアの方だった。

降参を告げるように、両手をあげる。

「髪が短かったよ」

「え？」

「シャギーって言えばいいのかな、ああいうの。顔の輪郭に沿って、削いだような髪型だった。色は金とも赤とも言えない。胡桃みたいな薄い茶色」

淡々と、特徴を並べていく。

「たぶん身長が高い。少なくとも、俺以上に。細身の筋肉質でランナーみたいだった。握力もやたら強かったし」

「覚えてるんだ」

兄が嘘ばかりつくのは今に始まったことではないので、ロールは特に驚かなかった。リリイの方は何も言えずに、口をぱくぱくとさせていたが。

「覚えてないよ。肝心の顔立ちが浮かばない」

スティアは、本当に不満のようだった。

「隠そうと思えば隠せる特徴ばっか。たいした手がかりにはならないよ」

「でも、よくそれだけ観察できたね。寝てる間に襲われたん……だよね？」

訊きながら、リリイの言葉の末尾が疑問系になった。

今は朝なので目立たないが、部屋の明かりは昨晩からずっとつけっぱなしのままだった。襲撃された時は、窓も大きく開かれていた。スティアは頷いた。

「明かりつけっぱなしで寝ちゃうのは、よくあるんだ。正直言って、眠りにつく前後の記憶っていつもないから」

「危ないなあ……」

「でも窓は絶対に閉めた。カーテンも。ドアの鍵と一緒に、それだけは覚えてる」

ロールはちらりと窓を見た。安宿の安い鍵だ。鍵や泥棒のことなんてイメージでしか思い描けないが、なんとなく、これなら外からでも開けられそうだなあと思った。三階の窓に貼りつくことが可能であるかは、別として。

スティアは続けた。

「顔がうる覚えだから、年齢もよく分からない。ぱっと見で、大人だと思ったから、年下ってことはない気がするけど……。ハッキリ覚えてるのは、目の色だけかな。濁った灰色。狂獣と同じ目で、ひ

たすら睨んできた」

昨日も言っていた言葉を、噛みしめるように口にした。

「どういうことだろうね、これ」

ロールやリリイは、なにも言えない。だからスティアが続ける。

「狂獣はアニマを許容量以上に体に取り込んでしまうことで、理性を崩壊させた野生動物。だけど人間は、絶対にアニマに毒されたりはしない。大陸中の生き物が狂いまくってる中で、ずっと理性を保ってる。……そうであると言われる」

専門家であるレイバに、同じことを聞いたことがあった。——森人はアニマに敏感であるゆえに、増えすぎたアニマによって発狂して滅びた。対する人間は、アニマに鈍感だったからこそ、独立した文明を築いて繁栄した。

「それに、もし人間もバーサク状態になることが可能だとしても、狙われるなんてありえない。動機は置いて、理性を失ってる人間が、特定の誰かを狙って、鍵を開けてダイレクトに首締めなんて、絶対にできない」

それは分かる。猛獣が獲物を選ばないのと同じだ。

「どうして人間がああなっているのかも分からないし、そうなってしまった人が、あえて俺を狙う理由も、仕組みも分からない」

「つけられてたのかな」

リリイは不安そうだった。

「昨日宿屋を選ぶ時、迷ったよね。ここは偶然見つけた三件目だし、ギリギリまで監視されてたとは思えない。でも、どうして、どうやって」

じっと、彼女はスティアの方を見た。

「ポリスと呼ぶなって言ってたよね。狙われる心当たりはあるの？」

「当然、第一候補はレアリス・カンパニー」

スティアは即答した。

「けどちょっと妙なんだ。カンパニーの連中は、俺の命を直接狙ってくることは、今まではなかったし……」

「? どういうこと」

「奴らは、ロールの前で人殺しはしない。〈セカンド〉の二の舞を恐れてる」

リリイは目を見張る。――彼女の父は〈セカンドクロス〉で命を落とした。

「……不確定要素が多すぎるな。いつまでも現場にいるのも間抜けか」

スティアは嘆息してから、しきり直すように、湿った髪の中に手を入れた。機械の右手を、腰に当てる。

「とりあえず、みんな寝起きのまんまじゃ何だし、いったん解散しよう。これ以上の会議は、宿の外で」

「引き払うの?」

「それはちよつと考え中。荷物はここに置いても回収くらいはできると思うけど、保証はできないから各自で管理して。……で」

兄は言葉を切って、少し考えたようだった。

だが次の瞬間には心を決めたらしい。小さく息を吸って、口を開く。

「変装しよう」

沈黙。

「……はあ?」

だいたい予想通りのリリイの声を聞きながら、ロールは今日の朝ごはんは何にしようかなあと考えていた。

宿近くの大通りに店を構える、小さなカフェ。

ダークブラウンのフロアリングに、同系色のテーブル。ナプキンに包まれた、銀色のナイフにフォーク。壁際に添えられた造花。表の黒板に書かれたメニューの値段のわりに、上品で好感が持てる内装だった。

この町の治安を示しているようで、興味深くはあったはずだが……あいにくりリイの視線は、店の内装などよりも、テーブルの向かいに座る兄妹に釘付けのままだった。

茶髪。

——不健康さを匂わせるほどの深刻な痩身と、不釣り合いに余裕のある整った笑顔。そのあたりはいつも通りの、兄。

だが他の特徴がことごとく消えていた。まず、髪が栗色だった。男にしてはやや長い。少なくとも、彼の普段の髪型よりは。

前髪の下でこちらを見ている、作りものめいた瞳の色は、深い茶色だった。

細い眼鏡をかけていた。レンズごしの目が、かなりぱっちりとして見えるので、度はほとんど入っていないのかもしれない。伊達であることを知っているからこそ、こう分析ができるのだろうか……。ごく普通のシャツ。きれいなシルエットのカーディガン。ただの学生にしか見えなかった。どちらかといえば、外で思い切り騒ぐよりは、窓辺で優雅に本でも読んでいる方が似合うタイプの。

変わらないのは、両手にはめた手袋と、両の耳たぶにつけたシルバーピアス。つま先が少し汚れた見覚えのあるブーツ。目や鼻や、口の形。

「……なんでそんなに用意がいいかなあ」
納得いかず、リリイはうめいた。

自分の荷物には、もちろん変装の道具なんてなかった。実用一辺

倒のいつも通りの洋服を、最低限の数しか持ち合わせていなかったのだ。

仕方がないから「経費扱い」で一着、スカートを買った。この町で流行っているらしい、色とりどりの染め模様が裾に広がるやわらかなロングスカートを選んだ。印象を変えられるから。そして、服の中に武器が隠せるからだ。

髪は思いつき豪快に上げた。着替える際に、鏡の前でどうしたものかと迷っていると、ロールが妙に楽しそうにニコニコ笑って、わたしやりたいです、と申し出たのである。結果として出来上がったのは、頭の登頂で大きく丸まった、なかなか個性的なおだんご頭だ。したことのなかった髪型なので、少し落ち着かない。

そういうロールも、実に鮮やかな手際で変装をしていた。銀髪は完全に隠して、今はスティアと似た色の茶髪に変身している。確実にカツラと見えるそれを、さらにまとめてアレンジをしているのだから、けっこう器用なのかもしれない。

スカートやワンピースを好んで着る印象があったが、今身につけているのはサロペットだった。普段よりは素朴な雰囲気だ。こちらはこちらで可愛い。

いつもの眼帯は外していた。代わりに、薬局で売っていそうな使い捨てのものを、ガーゼと一緒にあてがっている。けが人を装っているのだろう。

反対側の瞳は、やはりスティアと同じく、深い茶色に変貌していた。

「いつも持ってたんだよ。俺もロールも南じゃ目立つでしょ」

スティアが自身の髪を指しながら言った。ロールが笑う。

「今回は『文学少年』にしたんだね」

楽しそうに身を乗り出す妹の頭に手を乗せて、スティアはその視線の向きを、むりやりに押し曲げる。

「殺されかけて昨日の今日だし。敵にどれだけマークされてるかよく分からないけど、特徴を隠しておくに越したことはないから。普

段目立ってる分、髪と目だけ隠せば、手がかりが一気に消えるんだよ」

たしかになまじ整ってしまっている分、色さえ変えてしまえば、個人を特定できるような特徴は一気に消えてしまうらしい。それぞれ体格や眼帯が目立つとはいえ、外部からは格段に発見されにくくなるだろう。特にこの街は人が多いのだ。

そういえば、スティアはデカルトの事件の翌日、学校に偵察に行ったときにも、変装してた、と言っていた気がする。

「目の色とか、どうやって変えてるの」

「カラーコンタクト」

「？」

「コンタクトレンズに色をつけるとこういう風になるの。舞台とかで使うらしい。人間って、本当にアホな発明ばかりするよね」

「聞いたことはあるような……。目の中に何か入るって怖くない？」

「別に。そういうのは全部慣れた。五本くらい同時に注射されても、泣かない自信あるね」

たしかに、彼はピアスを開けることにも、ためらいを見せなかった。科学者による肉体改造を受けた身だ。語弊のある言い方かもしれないが、自分の体を傷つけることには慣れているのだろう。

ロールの左目が相変わらずな所を見るに、白目までを別の色に呑み込まれた眼球に、上から色をつけることはできないようだが。

「まあ、とりあえず現状を整理しよう。昨日の女のことも含めてね」
軽い朝食と飲み物が運ばれてきた後、スティアが切り出した。彼の前に置かれているのは水だけだ。

運ばれたばかりのコップの場所をずらし、彼は鞆の中から取り出したものをテーブルに広げた。この街の簡易な地図だった。宿のカウンターでもらってきたらしい。

「ロール、この街に来た目的は分かってる？」

「えっと、カラストーンがどこかにあるから、回収するんでしょ」

「正解」

それくらい分かってるよ、とでも言いたげにロールはじつと兄を見るが、スティアは特に気にする様子もなかった。淡々と続ける。

「俺がレイバにもらった情報は、ユングにそれがあるから行ってこい、てだけ。どの色が、どんな場所に、どんな状況で置かれているかは、これから調査しなきゃいけない」

「アバウトだね……」

「この街に移動したのは最近らしい。今まではどんだけ金積んでも動かなかった、フーコーの商人が手放したらいいんだ。当人にどんな心境変化があったかは知らないけど、現物はおおかた、古物商に紛れたとかそんなんじゃない？　どっかの金持ちが後生大事に宝物にしてるか、誰かが落としたのをそこの貧乏人が拾ってるか、あるいはすでにカンパニーが買収してるか、まあ、いろいろ考えられる」

「確かめようがないじゃない」

「そ。手がかりは、はっきり言って何も無い」

スティアは断言して、街の地図を見つめた。

道が多く複雑な形ではあったが、区画を機能別に区切っているという点ではデカルトと大差がないようだった。今いるのが街の北部で、倉庫街と繁華街の間にあたる。南に向かうにつれ、区画が広くなっている。スティアが言っていた生産地帯だろうか。

繁華街の西側に〈情報街〉という名称が書かれている。これは噂に聞いたことがある。――高層建築が集っているのも、たぶんこのあたりだ。

「テンプルのリーダーだと、観測地点はこの街のどこか。俺のもらった小型リーダーだと……まあ、漠然とこのへん」

スティアはその〈情報街〉全体を指してから、再び荷物に手を突っ込んで、こぶし大のモニターを取り出した。形は正方形に近く、端にはアンテナがついている。

スティアはテーブルの中心でそれを水平に傾けた。さかさまなの

で分かりにくい部分もあったが、画面のドットが座標を描いているのはなんとなく分かった。一点が点滅している。

「技術的な都合で、縮尺がいい加減なんだ。だから正確な住所までは分からないし、片っ端から聞き回すには広すぎる」

「人も多そう。珍しい施設がいっぱいあるから、ガードと観光客も集まってるはずだよ。学校で噂を聞いたことある」

「やみくもに調査するには不向きな場所ってことだね。情報ビジネスにはカンパニーの介入も大きいし」

レアリス・カンパニーは、狂獣に閉ざされたこの社会を、紙一重で支えることに一役買っている巨大企業だ。

シエルター、シールドといったストーン動力の新技術や、電波通信・機械武器の開発といった、この時代に需要を広げるほぼすべてのものを――まるであらかじめ予測していたかのように、必要とされるほとんどのものを――安定した技術と信頼のおける価格で、市民に供給している。

その表の顔はすべて現実であるが、裏ではテンプルと同じく、カラストーンや〈ブラック〉〈ホワイト〉といった古代遺産に着目し、その回収を目的に、手段を選ばない暗躍を繰り返しているらしい。スティアやロールは、幼い頃に一派に誘拐されそうになったことがあり、デカルトでのリリイも似た被害を受けた。そのような事情もあって、リリイ達の雇い主であうテンプルは、レアリス・カンパニーと友好的に提携をしながら、水面下では敵対している。

カンパニーが政府と協力してガードやハンターを用いた治安維持構想を完成させたのに対し、テンプルがこっそりと〈裏ガード〉仲間などという、ふざけた商売を成立させている事を考えると、二つの組織の関係は分かりやすい。大陸の安全管理に携わる技術者の立場を利用して、情報や流通を大きく制限下に置こうとしているカンパニー。対して、テンプルは彼らを出し抜くための抜け道を作ったということだ。

「最悪、すでにカンパニーの連中がこの街の石を回収してて、〈情

報街」の中にある自分たちの施設に隠しているってパターンが考えられる」

リーダーを指し示しながら、スティアは淡々と言った。

「だとしたらだいぶピンチだね。バッチリ罠が張られてる敵の陣地に、焦って飛び込んだ所で、勝てるわけがない」

「言い切っちゃうんだ」

「奇跡を期待してちゃ喧嘩には勝てないよ。特に俺は正面から戦ったりするのは苦手だし」

スティアは当然のように、断言する。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、とか言って勝算もなく飛び込んだって、勇気を讃えられて賞品ゲット、とはいかないでしょ」

「……同感だけど」

不思議に思っ、リリィは首を傾げた。

「でも、奇跡を起こすのが——って言うところちょっと違うかもしれないけど、不可能を可能にするのが魔法だって、さんざん言ってたのはあなたなのに」

スティアは、見た目にはただのひ弱な少年だが、文字通りそれだけの存在かと言うと、わずかに違う。

リリィは、何も置かれていないテーブルと、そこに座るスティアの体を改めて見た。今日も相変わらず、まともな食事をとらない。

もちろん、普通ならば体が持つわけがない。普通でないのだ。摂食行為というものを、体が拒絶するのだと本人は言っていた。それでも生きていける、裏付けがあるのだと。

——アニマが生かしてくれる。

機械でできた彼の右腕と、その奥に装着されたヘカラストーン。――

テンプルでは、秘密裏に推し進められている科学者たちの研究がある。

リリィの叔父が所属するテンプル技術開発局は、失われた文明と同じものを、違うアプローチで実現しようとしている。科学的な視

点で、魔法の源であると言われる不可視の粒子へアニマを操る手段を探っているのだ。

結果として、形になったのが、疑似魔法実現装置へキャロル。実験の被験者であるスティアは、右腕を捧げ、身を削るようにして不思議な力を入れた。食欲が壊滅し、体力が減退、睡眠に飲まれてゆくような生活に陥りながらも、いざというとき彼の機械義肢は、魔法の奇跡を意のままに描く。

健康を代価に、不可能を可能にするための力を手に入れた。

「だからこそ、だよ」

スティアは、肩をすくめるようにして片手をあげた。

装着した手袋は、飲食店の中では余計に浮いて見える。機械の義手であるへキャロルを隠すためのものだ。

「魔法を使うには石がいる。俺が持つてる石は三つ。六つ集めて初めて完全体なんだから、今はまだ過信できない。一人前になる前に玉砕したら笑えないでしょ」

言いながら、椅子の背もたれに体重を預けた。

「だから、カンパニーに見つからないことを第一に、長期滞在を覚悟で慎重にしようと思ってたんだけどね」

「……そのタイミングで、昨日の襲撃？」

スティアは苦笑いをして、頷いた。

「そ。はつきり言って、意味が分からない」

カチャリと音がした。ロールが、飲み終わったホットレモンのカップを、皿の上に置いていた。

スティアはその仕草を横目で見つつ、つぶやいた。

「誰かがけしかけた、てのが直感かな」

「え？」

「猛獣は単独で作戦を描いたりしない。わざわざピンポイントで俺を狙うなら、猛獣使いにあたる別の存在がいるんじゃないかと思う。それをカンパニーだと考えれば、スツキリと腑に落ちるんだよね」

「あの女の人、自分の意志でスティアを襲ったんじゃない……っ

てこと」

「あくまで勘。だけど、どう見ても正気じゃなかった。そして狂獣と同じ目だ」

彼はコップについた結露を指でなぞった。わずかな水滴が、手袋に染みる。

「自我を失った獣に、食欲や危険回避以外の殺意はない。あんたもよく知ってるでしょ」

「……誰かの手で、あの女の人は狂暴化させられた？」

「そう考えるのが妥当だと思う。本当に可能かどうかは、レイバに確認してみなきゃ分からないけど」

「それは、つまり……」

リリィは言葉に詰まるのを感じつつも、意を決して続きを口にした。

「あの女の人を凶器にして、誰かがスティアを殺そうとしたってこと」

「……………」

だが彼は、考え込むようにしばらく黙った。口を開く。

「それにしても中途半端だね」

「？」

「あの女がナイフのひとつでも持ってたなら、胸を刺されて部屋中血塗れになってたかもしれない」

淡々とした声で、彼はそう言った。

「武器を隠せない事情があったにせよ、どうせ襲撃させるなら若い女なんかじゃなくて、ごつい大男にすればよかったんだ。そうしたら、首を握り潰される前に抵抗できたか自信はない」

「……………」

「でも、危なかった。今までのカンパニーはここまでギリギリの橋は渡ってこなかったはずなんだ」

無感情に現実を並べる、その表情に目に見えた変化はない。だが、青ざめて見えた。血色が悪いのはいつものことだが。

そうだ。リリイは意識を引き締めた。淡々とした口調やら、ドライな物言いがそういった印象を薄くするが、スティアにしてみれば今は殺されかけた翌朝だ。敵の正体も理由も分からない。

恐れていないはずがない。

「リリイに、確認しておきたい事がある」

「何？」

スティアは声を潜めた。

「さっきも言ったように、レアリス・カンパニーは俺を直接は殺せない。これは覚えておいてほしい」

「……………」

「たぶん、この先あんたも直接命を狙われることはないと思う。デカルトの学校でロールが登場したとたんに、セイが大人しくなったのを覚えてるよね」

頷くと、スティアは眼鏡の位置を直した。

「奴らもへセカンド・グランドクロスでは犠牲を出した。ロールを挑発しすぎて失敗したんだ。こいつが泣き叫ぶようなことが起きたら、その瞬間に次はこの街が消し飛ぶかもしれないし、獣がいよいよ発狂するかもしれない。ロールの近くで俺を殺そうとするって事は、そういう危険をはらんでるんだよ」

ロールはサンドイッチを咀嚼していた。

いつものように、なんでもない表情をしている。だが、伏し目がちになっていた。

スティアは構わず続ける。話題を早く終わらせようとするように。「ハッキリ言えば、レイバが俺を被験者を選んだ理由の半分はこれさ。〈ブラック〉の身内であることを上手く使えば、実力差をカバーするチャンスが増える。レイバは俺とロールを直接探索に出すことで、世界中を人質にとったんだ」

「……………」

「だから、カンパニーの連中は喧嘩をする時に手加減をする。デカルトでもそうだったでしょ。問答無用で殺されなかったのは何も、

法律が味方してくれたってだけじゃないんだ」

彼は、シャツの襟元に手を入れた。

握りつぶせそうな細い首筋に、実際に握りつぶそうとした痕があるのが、ちらりと見えた。

「その安全地帯が、今回さっそく、あっさり破られたわけだけどね」
苦笑するその顔が、自嘲しているようにも見えた。「油断した」

「警戒しなきゃ」

リリィは肩が緊張するのを感じていた。

「だってそれなら、また来るよね。あの人」

「どうだかね。一応、ケガはさせたけど……」

スティアはため息混じりに言った。

「どっちかと言えばさ、刺客うんぬんよりも、むしろわざわざ寝こみを狙われてるあたりが怖い」

「？」

「体質のことがバレてるかもしれない」

リリィは、はっとした。

スティアは薬なしで生活ができない。

その副作用で、寝付きが異常によく、寝起きが異常に悪い。薬や他人の介助なしでは、正しいサイクルで一日を過ごすことが困難なほどだ。

「あの女は本当に狂獣みたいだった。俺がどんなに無防備で、抵抗のしようもない状態にあっても、良心の呵責なんかなく、力任せに襲えるんだと思う」

口調は、あくまでいつも通り落ち着いている。

スティアは、口角をつり上げた。笑いながら絶望的な言葉を紡ぐ。

「夜の襲撃が続けられたら、ずっと耐えられる自信はない」

それでも、石の手がかりはあの女しかない事は事実だった。

不本意ながらも、スティアはカフェのテーブル上で通信機のスイッチを押した。小さなモニターに表示された苛立たしい字面。「技術開発局」。

取り次いでもらった先は、もちろんレイバだ。

「よう若者。数日の移動生活を経た体調はどう？　　というか都会の町並みはどう？　　人混みに酔って衰弱してとっつかまったりしてない？」

「質問があるんだ。答えて」

向こうの質問はすべて無視して本題に切り込むと、受話器の向こうでレイバの鼻が鳴った。

「せっかちめ。はい、どうぞ」

「人間が狂獣と同じような、狂暴化^{バーサク}状態に陥ることはありうる？」
「ないな」

即答だった。

「理論上、というか生物の分類上は、ない。ありえない。アニメに鈍感であることそのものが、『人間』の定義だからね」

「どういうこと？」

「狂暴化ってのは、まあ細かい条件は省くけど、〈アニメ〉と呼ばれる目に見えないもの、霊的なものを感じられる種族だけに起きる。人間はそれが感じられないからこそ『人間』と呼ばれる。俺たちと同じ姿をした生き物で、かつアニメがハッキリ見える奴は『森人』って分類になると思うよ。解剖しないことには分からんけど」

「……ああ、なるほど」

「セイ・ホワイトは例外中の例外な」

「あいつの話はいいよ」

口早に話題を切ると、正面でこちらの様子を見ているリリーの顔

が不安げなものになった。なんでもないことを手で示しながら反省する。嫌いな相手の話題を早々と切り上げようとしてしまうのは、自分の悪い癖だった。

受話器の向こうのレイバは慣れているからか、気にした様子もなかった。

「どうしてそんな質問をするんだ？　なんかあった？」

スティアはこれまでの事情をあらかた話した。レイバは珍しく焦った様子で無事を確認してきたが、最後まで話し終えたと「リリイが無事なら別にいいや」とあっさり納得したようだった。こちらとしても彼の心境はどうでもよかったので、お互い様である。

説明のさなか、レイバは時おり唸りはしたが、思っていたよりは驚かなかった。それなりの着地点を見つけたらしい。

「人間が狂暴化する現象は、これまでは一度も数えられていないはずだけど、机上の仮定ならいくつかパターン分けできるかな」

レイバが受話器越しに説明を始める、その顔が鮮やかに浮かぶのがしゃくだった。スティアは宿から持ってきたペンを左手に持ち、メモをテーブルで広げた。

「人間を人種別に考えるなら、アニマへの適応能力が一番高いのが銀髪種。次いで金髪、最後に茶髪・赤毛。言い方を変えれば、色が薄ければ薄いほど性質が森人に近い。お前も知っての通り、魔法使いの素養が強いわけだ。いわゆる『靈感』が強い人間は統計をとれば銀髪に多いんだけど、それはこういうこと。……裏を返せば、アニマの影響を受けやすい。色が薄い奴だったら、なにかの間違いで狂暴化する可能性もないとは言えない、かもしれない」

「茶髪だったよ。……いや、金髪だった。中間っぽかったような」「それじゃ、違うな。茶色にしろハーフにしろ似たようなもん。自然発生はありえないと思う」

レイバの言葉をそのままメモ帳に走らせる。リリイがじっと手元を見ているのを意識する。

「パターンその二。デカルトで俺が使ってたキメラを覚えてる？」

ああいう、外からの介入が考えられなくもない」

「キメラと同じ？」

「俺は自我崩壊した獣を、ロールというリソースを使って操作した。非科学的な言い方を借りれば暗示のようなものさ。思考パターンをプログラム化して、なんらかのマジックプログラムに書き換えて、アニメで頭をいじくり回せば、狂獣を洗脳することはできなくもない。同じことを人間に施す方法があるのかもしれない」

「魔法で操ってるって言いたいのか？」

「そういうことだな。条件が厳しすぎるから、普通に考えれば不可能だけど。不可能を可能にするのが魔法だし、ユングにはカラーストーンがある」

レイバの声はあくまで淡々としている。

「最悪の最悪を仮定すれば、ユングのカラーストーンはすでにカンパニーに回収されていて、俺たちも知らないような、人間を操るための技術として、何らかの使用法を確立したってことも考えられる」
「……魔法を実現する装置は、〈キャロル〉だけとは限らないってことかよ」

「向こうの技術だって日々進んでるだろうから、そのへんは俺には何とも言えないね。最悪の仮定、だよ」

メモに大きく『最悪』と書いてみた。リリイがさっと青ざめるのがちよつと面白かった。

レイバが続ける。

「手がかりが少なすぎるから、切り分けとしてはそんなもんかな。なんだったらこっちから調査してみる？」

「できるのか？」

「自然発生の可能性はほぼないと思うけど、周辺のパワースポットを調べてみる。例のルールも走ってるみたいだし、そう的外れなことでもないと思う。洗脳の可能性についてはスパイでも送らないとハッキリとは分からないけど、一応そっちのギルドに連絡入れて調査してもらうよ」

「助かる」

「明日また連絡する。今日はくれぐれも警戒して、くれぐれも死ぬなよ。今お前に死なれたらいろいろな面倒なんだよ」

最後の言葉が、そのままの意味の本心である所が、レイバのレイバたる所以であると思う。

スティアは通信を切った。リリィは緊張しきった様子でこちらを見ている。ルールがぼーっとしている事との対比が見事だった。

「調査は頼んだ。今はなんとも言えない。ざっとこんな感じかな」

書きとったメモを二人に見えるように移動させると、リリィの表情がばか正直に険しくなった。彼女はそのまま、暗号でも探しだそうとでもするようにじーっとメモを見た。唇の端がひくりとしそうになるのを噛みつぶして、スティアは笑ってみせた。

「字、汚くてすみません」

「えっと……」

リリィが世辞の言葉を見失うことに驚けない程度には、悪筆の自覚がある。利き手がもとも右だったんだからしょうがないじゃないか、とは彼女に愚痴っても仕方がない。書き取りの練習をサボりぎみだったのは事実である。

文字のひとつひとつを辿りながら、レイバから聞いた話を反復した。リリィが不安そうに納得するのを確認して、説明を切り上げる。どうせルールは聞いていない。

「ということで、今日できることは終わりだね。……とはいえ、宿に引きこもるのも逆にぞっとしないし、夜までは外にいて人ごみを盾にしとこ。せっかく変装したんだし、歩いて行ってみたいところがあるんだ」

「どこ？」

「情報街」

メモとペンを片づけて、伊達眼鏡のフレームをくいとあげてみた。変装で眼鏡をかけると、つい必要以上にこれをやってしまう。

「詳しい住所は分からないけど、たぶんそのあたりに、カンパニー

の息がかかった施設があるんじゃないかな。そしたら、例の女は完全にカンパニーの刺客だと見て間違いない」

「……そっか。今の推論じゃ、百パーセントじゃないんだもんね」

「ほぼ確実だろうけどね。どっちにしろ、敵の本拠地っぽい場所の住所とか、道順とか、周りの様子とかを知っておくことは損にならないでしょ。こっちには地の利がないからさ」

大通りに出てすぐに、向かい側のカフェの中から、悲鳴と物音が聞こえた。

店を囲うように、少しずつ野次馬が出来ていった。ステイアはその人込みを見つけて、足を止めてしまった。後ろを歩いていたりリイとロールが釣られると同時に、ガシャン、とガラスが割れる物騒な音。たたみかけるように、重く乱暴な足音。

店のドアが内側から開いた。

もつれるような足取りで、逃げ出してきたのは女性だった。人込みにまぎれて、その顔はステイアからはよく見えない。いや……

一瞬だけ見えた。そして、思いがけずその一瞬で、思考が止まる。かわいい。

華奢ながら、どこかふっくらとした女性らしい肢体。毛先だけゆるやかにカールしたレッドブラウンの髪。かすかに乱れた髪型を整えるその手首で、金の時計が光っている。

ダークブラウンの大きな瞳はどちらかと言えば幼く見える。だが身につけているブラウスやスカートはそれなりの品と一目で知れたし、きちんと化粧をしているのもすぐに分かる。受付嬢のような印象を受けつつも、それも少し違うかなと思った。もっと、隙があると言えいいのか、あどけないと言えいいのか……身近な感じがする。

のんきな感想を抱いている間に、彼女は悲壮な顔で人込みを漠然と見つめた。どこに向けるでもなく、声をあげる。

「誰か！」

店の中からまた物音がした。出入り口のドアから、男が二人転げ落ちる。スーツを着た太った男が、あとから出てきた若者に殴られて派手に転倒した。

乱闘騒ぎを目前にして、野次馬が悲鳴とも興奮ともつかぬ音を発する。最初に出てきた女性は怯えきった声で叫んだ。

「やめて！」

若者が、スーツの男をそのまま組み敷いた。右手を握りしめて、力をためるように高く掲げる。押し倒されたスーツは、腕を交差させて顔を庇った。次の瞬間には、がら空きになった鳩尾に尖った拳が食い込んだ。

悲鳴と、それに混ざった歓声とが、一際大きくなった。

「……行こう」

スティアは、ようやく騒ぎから目をそらして、後ろにいたりリイに囁いた。彼女も自分と同じく、啞然として乱闘を見つめていた。

「かわり合いにならない方がいい」

そう言った瞬間に、野次馬の悲鳴が一気に膨れ上がった。

事態から目をそらしていなかったロールが、眼帯に隠れていない右目をまんまるにしている。スティアも振り返ってぎょっとした。喧嘩を止めようと乱入した大衆を、若者が振り払う。威嚇する右手には、隠していたらしい大振りのナイフが握られていた。

改めて見やると、その男は『若者』という形容すらも大げさに感じられるくらいに、若い。つまりは幼い。たぶん自分よりも年下なのではないかと思った。十四か、十五か、その程度だろう。

貧相な印象を受けた。体格のせいだ。こけた頬。くぼんだ鎖骨。成長期をばく進して骨だけが先に伸びてしまったというケースには見えなかった。もっと、自分に近い。たとえば。

食べていない。――金がなくて、食べられない？

服はぼろというほどでもない。むしろ質が良さそうだ。だが、身体と、そして凄絶に相手を睨みあげる目つきが、追いつめられた貧

民のそれを連想させる。

——そこに着目したのは、どうやら自分だけだったらしい。

ナイフに怯えた悲鳴が波になって、周囲が混乱する。我先にと逃げ出す人々が絡み合って、人通りの多かった大通りはたちまちごった返した。車道に飛び出す者の前で車がクラクションを鳴らす。スティアがいる場所にも人の波が押し寄せた。舌打ちする。

ちらりと視線を投げる。リリィとロールはあっけにとられながら立ち尽くしていた。スティアは短く告げた。

「やっぱ無理だ。ここにいて。荷物しっかり抱えてて」

言い残して、人込みを縫って移動した。手袋をした右手の甲を額に当てる。——効果の小さい魔法なら、誰にも気づかれずに発動させることは可能だった。

手の下から、前方を広く睨む。視界を広げる意識を強く持ち、色だけが世界を構成するイメージを描いた。ごったがえす肌色と茶色。人ごみにひらめく色とりどりの布。壁、道、そして看板。

カフェの入り口に垂れ下がっていた看板は、木製の板を塗装したモスグリーン。

手袋の下で、鮮やかなグリーンのランプが光る。瞬時に彩度を下げ、数字の数字を頭に並べた。そして。

看板の方向に手をかざす。意志に応えて、留め金が弾けた。飛来する。

狙い違わず、ナイフを持った若者の右手に看板が直撃した。こぼれ落ちたナイフが宙を泳ぐ。勇ましい野次馬たちは見逃さなかった。武器に手を伸ばす者と、なんとか若者を取り押さえようと飛びかかる者の影が踊る。

だが若者の判断もまた早かった。ナイフを見捨てて、捕まるより早く、一気に走り去った。狭い路地裏めがけて一直線に。

それでも追いかけた者の姿が見えたが、悲鳴をあげて戻ってきた。何が起きたかはスティアの立つ場所からは見えなかったが、ざわめきは耳に届いた。

「あいつの仲間か……っ、なにが、なんだか……」

「深追いするな！ 路地裏に何かいるぞ！」

その言葉の意味も分からないうちに、ポリスの車のサイレンが聞こえてきた。人々が安心と不安の混じった表情で足を鈍らせるのを見て、スティアは潮時だと判断した。ポリスには出来る限り関わりたくない。早くこの場を離れなければ。

リリィたちの元に戻るべく方向を転換すると、背中が誰かにぶつかった。

「すみませ……」

ん、と続けようとした唇が思わず止まる。

女性がいた。最初にカフェから逃げて、悲鳴をあげていた人だ。

遠目に見て想像していたよりはずっと落ち着いているように見えた。垂れ目で、どちらかと言えばあどけない顔立ちだが、近くで見ると大人であることを意識させられる。ほんのわずかに届く香水の薫りも一因だろう。スティアは化粧品のだぐいの匂いがどちらかと言えど苦手だったが、これは不快に感じない。石鹸の匂いに似たやさしい香りだ。

左目の下にホクロがある。特徴らしい特徴はそのくらいか。特別な派手さがあるわけではない。目立つか目立たないかと言われれば、たいして目立たないはずだ。

だが美人だ。すごく。——たぶん、大多数の人間は同じことを思うだろう。

サイレンが近づいてくる。

彼女は野次馬のどよめきの中で、肩を跳ねさせた。反射的に、だろう。近くにいたスティアのジャケットの裾をつかんだ。

「ポリス……」

うわ言のように、そう呟いた。「ポリスが来てるの？」

「こっただけ騒げば、誰かは通報しますよ」

早くこの場を離れたかったので口早に答えた。さりげなく女性の指を振り払おうとするが、その瞬間、握力が遠慮なく強まった。

「お願い」

悲壮な表情で、ぽつりと声。

「どこでもいいから、ここから連れ出して下さい。警察には関われなくて。――違う。ここでは悪いことなんかしてない。でもちよつと、事情が」

「自分で逃げて下さいよ」

立ち去ろうとしたが、服を離してもらえず、必然的に引っ張られる形になった。文句を言うより早く、懇願するような顔がまっすぐにこちらを見た。

「足が……」

泣きそうな声でそう言いながら、自らの足を指さした。ふくらはぎの擦り傷から血が滲んでストッキングに染みている。転んでくじいたのか、ハイヒールを履いた右足の先が、かなり不格好に傾いていた。

この足で、この靴で、ポリスが来る前にこの人混みを脱出するの骨だろう。

「……………」

振り払うのも気が引けた。

スティアは女性の指をそっと、丁寧に払った。右手の義肢に触れると面倒なので、そうなる前に、左手を差し出す。

女性はとても自然に、こちらの好意に甘えた。なめらかで小さな指が、触れる。爪は決して伸ばしすぎずに、清潔に整えられていた。スティアはそのままエスコートでもするような心持ちで、リリィたちの所に戻った。目を丸くする彼女たちへの説明もあとまわしに、取り急ぎ、表通りを離れた。

きれいな脚だ。

そんなことを思いながら、リリイは荷物に入れていた救急キットから取り出した包帯を、目の前の脚に巻き付けて固定した。傷のひともない真っ白なふくらはぎだが、足の裏には、ハイヒールを履き慣れている証に、不自然なマメがあった。

作業を終えて、ベンチに座ったその女性を見上げる。感動しきつたように目を丸くしていた。

「すごい、痛くない……」

「簡単なテーピングです。ちょっと見た目が大げさになっちゃったけど」

リリイは照れた笑みを浮かべながら、ひざまずいていた体勢から脚を伸ばして立ち上がった。

「ありがとう」

女性は笑った。大人っぽい外見に反して、子供のように大げさに。人懐こい人だとリリイは思った。

「素敵ね。こういうこと、テキパキできる人ってかっこいい。助かった」

「たいした事じゃないです」

照れ臭くて、リリイは思わず否定の言葉を口走っていた。

女性はおそろおそろ靴を履いてから、おそろおそろ歩いた。五、六歩で満足したのか、くるとターンをして振り返る。だが、その瞬間に、バランスを崩して片足がかくんと傾いた。

リリイは慌てて駆け寄ろうとしたが、その前に女性が笑い声を出した。

目を丸くする。彼女は自らの失敗を、心底おかしそうに笑っている。

「カッコつけたらダメだね」

花が開くような鮮やかな笑顔。

不思議な人だな、と思った。彼女の背格好は、ユングの都会的な町並みにすんなりと馴染む。だが、くるくると変わるその表情を見ていると、馴染んでいるはずなのに印象だけが強烈に残る。普通の人のなかに、心に残る。

姿形だけじゃない。態度？ 仕草？ それとも別の何かだろうか

……。

「で」

リリーの後ろからひよいとスティアが前に出る。女性がきよとんと向き直った。

「どうしてポリスを避けるんですか？ さっきの事件、あなたが被害者に見えました」

今、リリー達が立つ場所は、乱闘騒ぎがあつたカフェから、一本先の別の大通りだった。

街灯沿いに添えられたベンチの前で、女性が笑みを引っ込める。真剣な表情を作れば、両目に聡明そうな落ち着きが戻った。

彼女はしばらく黙ったが、すぐにスティアの方をまっすぐ見た。

「仕事の関係、かな」

「仕事？」

「さっきの暴力について、私は本当に巻き込まれたただけだけど、元とか職業とかの情報を含めてポリスと喋るのってちょっと……いえ、だいぶ面倒くさいの」

要領を得ない説明。スティアはまったく理解を示さずに黙ったまままだ。女性は自分だけ機嫌を取り戻して、場に華をそえるように笑う。

「安心して、別に指名手配犯とか怪盗じゃないよ。まずは自己紹介からした方がいいかな。私はミナ。名字はラシュフォード」

名乗りながら彼女は、スティアからリリー、ロールの順でしっかりと相手を見つめる。

若く美しい人だが、実年齢で言えばこちらよりずっと年上である

ことは疑いなかった。下手を打てば十くらいは離れているかもしれない。

未成年の集団に、本当にまともに、本当に対等に話しかけている。リーリリーの叔父にもそういう所はあったが。当たり前のようにいて、なかなかできることではないと思った。

「この街の研究所でアシスタントをやっています。兼業だけど、ライターとして記事を書くこともあるの」

「記事」

「科学雑誌とかね。あなた達くらいの子はあんまり読まないよね」

「……………」

スティアはしばし考えた。

「『サイエンス・トリニティ』とかメジャー所なら、ちょっとは見ますけど」

「うそ！」

ミナは目を丸くして、そしてすぐに興奮した様子で笑う。

「私そこで連載持ってるのよ。うれしいなー。ああいうの読んでるのって専門職のおじさんばかりなのかと思ってた。若い子も興味あるのね」

「専門職のおじさんだって昔は若かったでしょ」

スティアは笑った。

「まあ、自分は数字とか苦手なんでナナメ読みですけど。分かったような気分になれるのが好きです」

「それでいいのよー。関心関心。せっかく門外漢にも分かりやすいように書いてるのに、結局は購買層が偏ってて空しかったんだ。無駄な努力じゃなくてよかった」

ミナはそう言って、直後、突然さつと蒼白になった。

「あ、でもだめだ。今のなし、オフレコね。表向きは出版社のライターさんが記事を書いていることになってるんだ。私は連載書かせてもらってるだけで、えーっと」

ゴーストライターは、ゴーストだから、ゴーストライターなの。

と、分かるような分からないようなことを言いながら、ミナは唇の前で両手の指でバツ印を作った。

「私、何も言っていないよ。言っていないからね！」

リリイとスティアの笑い声が重なった。ロールも、にこにこしている。

「ごめんね、話がずれちゃった……。いつまでも、こんな所に立ってるのもね。あなた達は、時間ある？」

周囲を気にしながら、ミナがそう言った。きよんとする。

「お礼がしたいのも、そうだけど……。ちよつと、またお願いしてもいいかな」

「なんですか」

「うまく歩けるか、自信がなくて。もっと歩きやすい換えの靴があるから、私の職場まで送ってほしいの。ちよつと距離あるんだ。：マツシュさんが無事に戻ってるか、確かめたいし」

「マツシュさん」

「さっき、殴られてた男の人。私が職場でお世話になってる人。はぐれちゃって」

リリイは先の乱闘騒ぎを思い出した。ナイフを振り回していたあの少年に、最初に組み敷かれていたスーツ姿の太った男。彼のことだろう。

「でも、だめかな。どこかに行くつもりだったのよね？」

「あなたの職場はどのあたりですか」

スティアが聞くと、ミナは即答した。

「〈情報街〉の端。ラジオ局があるのは知ってる？ その近く」

「なら、構いませんよ。どうせそっちに行くつもりだったし」

彼はあっさりと快諾した。

「ついでの通り道について、軽く紹介してくれると嬉しいです。観光名所でしょうし」

「あら。この街の人じゃないの？」

ミナは心底驚いたように目を丸くした。リリイ達の年代では、難

民を別にすれば、わざわざ他の街に越すものなど少ない。特に今の格好では仕事で来たといっても説得力がないだろう。

「つい一週間前に来ました。親戚の家に引き取られることになって」
しゃあしゃあと事実無根を並べるスティアに、ミナは素直に関心を示す。

「今のご時世に外から来るのって大変みたいね。ガードってガラが悪い人が多いし。最近はようやく教育設備が整った後にデビューした人が増えて、マシになったとは聞くけど」

ミナはベンチに置いていたハンドバッグを抱えた。改めて、こちら三人に向き直る。

「えっと……みんなのお名前、教えてもらってもいいかな」

「アルバート」

スティアが当然のようにそう言ったので、リリィは思わず目を皿にしてしまった。

彼は一瞬だけ意味深にこちらを見て、すぐにミナに向き直った。

「僕がアルバート、こっちが妹のソフィア。彼女が……」

なんとか考えようとしたようだが、結局は不自然にならない間隔で諦めたらしい。何食わぬ顔で口を開いた。

「リリィ。姉です」

（どうしてこんなことになってるの？）

（ごめんごめん。偽名と変装はセット。だいたいこの名前で通してる）

ロールの肩を借りたミナの背後で、リリィとスティアは小声で言い合っていた。今いた大通りをまっすぐに、ミナが指し示した道を歩いてゆく。

（私だけ本名だけど……）

（まあ、たぶん大丈夫。リリィはそれほど大勢にマークされてるわけじゃないだろうし）

（何を警戒してるの？）

（命を狙われてる状況下で、一番怪しい犯人はカンパニーでしょ。彼女は研究職についていて、情報街で働いている。同業他社ってのはどこで繋がってるか分かったもんじゃないからね）

理屈は理解できた。だがエイトといいスティアといい、外の世界の人間はいくつ偽名を持てば安心できるというのだろう。

（だったら、初めから関わらない方がいいんじゃない）

（現地に詳しい人間の話は聞いておいて損はないと思う。何より、俺たち三人がそのままオフィス街にいたら目立ちそうだし。最初はそれでもいいかと思っただけ、手段があるならそりゃ使うよ）

（うーん……）

男の子って綺麗な女の人にすごく弱いからなあ、と、デカルトで共に学校に通っていたクラスメイトを思い出しながら、そんなことを思ってしまう。スティアがいきなりミナと手を繋いで戻ってきた時には、さすがに度肝を抜かれたのだから、その印象が消えていないのかもしれない。

「あっちがね、書店」

ミナがロールに語りかけるように、通りの向かい側を指さす。リイは我に返ってそちらに目をやった。デカルトやスピノザとは比べものにならないくらい書店が大きい。そして、新しい。

「おっきいですね」

「でしょー。版元がこのあたりにゴロゴロあるから、発売も早いよ。図書館も中身が充実してるの。あ、書店の隣にあるパイ屋さんね、私のお気に入り。たっぷりバターのさくさく生地、季節の果物がじゅわーっと詰まってて、香ばしくて、甘酸っぱくて、すごく美味しいよ！」

想像しただけで喉が鳴りそうだった。デカルトではバターも果物も高級品だった。この街での値段はどのくらいだろう。

「どのお店の看板にも、同じようなものがついてますね」

リイがパイへ心を焦がしている横で、スティアの冷静な声。ミ

ナはロールの肩に掴まりながらくると振り返った。

言われてから初めて気づく。本屋にも菓子屋にも、看板の足や側面、つり下げるフックなどに、鮮やかな黄色のリボンが結んである。どこを見渡しても同じだった。ここの通り全体のイメージカラーなのだろうか？

だがミナは、にっこり笑って予想と違う答えをくれた。

「お祭りがあるのよ」

「え？」

「明日の夜からかな。あなた達も行けばいいと思う。この通りと、向こうの通りと、もう一個先の通りを全部、車を通行止めにして出店を出すの。いろいろイベントがあって結構盛り上がるよ。一年に一回のユング名物。協賛してるお店は、このリボンをつけてる」つまり、ほとんど全部の店だ。

「ある種の町おこしね。開催される日は、仕事を早く切り上げる企業も多いんだ。うちはさすがにそういうわけにもいかないけどね」ミナは自らが祭りの渦中にでもいるかのように、晴れやかに笑った。

そのまま談笑しながら、しばらく歩いた。ミナは途中で、ロールにばかり寄りかかってたら悪いかなどと言って、今度はリリーの腕にしがみついてきた。

間近で感じたミナの体重は、時々かくんとバランスを崩して頼りなかった。だが、無理をするでもなく辛い時は言ってくれるし、そうでない時は笑顔を絶やさないのでから、一緒にいて不安になることもなかった。

「ありがとう」

何度目か、体を支えて転倒を避けてやると、彼女は自然にそう言った。

ああ、そうかとリリーは気づいた。この女性は他人に迷惑をかけることを厭わない。自分たち一行の時間を拘束して、仕事場まで送らせることを丁寧願ってくる。だけど、「ごめんなさい」とは言

わない。こちらの好意をきちんと理解して、何度だって「ありがとう」と言う。嫌味のない、かわいらしい笑顔で。

だからこの人は素敵なんだ、とリリイは思った。人徳もあるだろうが……。

なんでもかんでも自分のことを自分でやろうとしたり、なんでもかんでも謝りがちな自分の性格を省みて、ちよっぴり反省する程度には、リリイはこの女性に好感を抱いていた。

結構な距離を歩いた。到着する頃には、すっかりオフィス街の雰囲気になっていった。ビルに飲食店、バー、正装した人間たち。

リリイはこっそりステイアに目をやった。相当疲れているのではないかと心配したが、思ったほどひどくもなさそうで、少なくとも態度の上では平静だった。ミナの歩調に合わせたからだろうか。

やがてミナが指した建物の前で足を止める。ラジオ局の隣に位置するその施設は、青かった。

文字通りの意味で、青かった。

敷地を囲うコンクリートはネズミ色、駐車場に停められた車はシルバーグレイ。だが中央に立つ建物そのものは、ひたすらどこまでも、壁が青い。ペンキでべったりと塗ったように、真っ青である。たいして大きな建物ではなかったが、恐ろしく目立つのは言うまでもなかった。

「見た目がこんななのは、ちゃんと理由があるんだけどね」

ミナは楽しそうに笑った。「まあ、企業秘密かな」

「株式会社トラスト……」

ステイアが、門の近くにたてられていた、これまた青い看板をじっと見てつぶやく。リリイも視線をやった。二階建てに見えるこの建物は、一階も二階も、そして地下室もすべて同じ会社のフロアらしい。

「知らないでしょ。でもけっこう社会貢献してるのよ」

ミナはいたずらっぽく笑った。

「レアリス・カンパニーのグループ会社なの。こう言えばちよつとエリートっぽいでしょ。ふふ、他人の権威は利用するが吉だね」
リリイは心底びっくりしたが、スティアはそら見たことかとも言いたげに、平然と頷いていた。

「研究成果とか、高く買ってくれそうですもんね」

カンパニーの事業の幅広さは、幅広い下請け会社を織り込んだ経営術の賜物なのだとミナは語った。

「特にこのへん一帯の会社はほとんど傘下って言うってもいいかな。それにしても、レアリス・カンパニーの原型は銃器メーカーのソロン社だったってことは意外と知られてないのねー。合併とか分裂を繰り返して、で、《ストーン》の開発を契機に、いろんなものが生まれて今みたいな形になった。私たちがみたいな専門家の協力あってこそなのに、何でも屋さんだと思われてるのが関係者としては心外」
「商売としては大成功でしょ。市民はなんでもカンパニーから買いますし、圧倒的な信頼を得てる」

「そうなんだけどね。だからこそ、下請け会社の地道な努力に光が当たらないのよ。別に目立ちたいわけじゃないのよ？　ただ、そのせいでポリスにまで睨まれるのはちよつとおかしいよね思っちゃう」
「ポリスに？」

リリイは首を傾げる。そういえば、ミナはポリスを避けているとスティアが言っていたが。

ミナは気むずかしく唸った。もともと愛嬌のあるかわいらしい顔立ちをしているので、いまいち迫力はなかったが。

「商売柄ね、いろいろ実験とかするのよ。ここは『会社』だけど、他にも郊外とかに『研究所』をいくつか持ってる。で、まあそこでいろいろやるわけだけど、いろいろをやるたびにいろいろあるから、けっこう呼び出されちゃうわけで……」

「よく分からないんですけど」

「私たちの実験のせいでたまにハンターから買った実験用の狂獣が

大暴走したり、火事になりかけたり、意味不明な怪音が鳴り響いたり、たったその程度のことです『またトラストか』ってレッテルが貼られたり、何か事件に巻き込まれるたびに『あんたトラストでしょ？ まともな生き方しないからこうなるんだよ』みたいなことを言われたりするのがとっても生き辛い。しくしく」

「……………」

「でも実験・研究の成果は天下のレアリス・カンパニー様の発展に役に立ってる。なのにポリスはカンパニー様にはヘコヘコするくせにウチの扱い悪いし。なーんか納得いかない」

言いたいことは分かるが、ポリスの気持ちもよく分かるとリリイは思った。

「ポリスを避けた理由はそれだけですか？」

ステイアが静かに聞いた。

「もうちょつと切羽詰まって見えましたけど」

「あはは。バレてるか。まあ、こっちに非がないってわけじゃないことは私たちも分かってるんだ」

ミナはあっさりと認めて苦笑した。

「法律的にはけっこうグレーなことも扱うのよね。これこそ本当に企業秘密だから言えないし、あなたたち以上に、ポリスには言えない」

「暴漢に殴られた被害者だとしても、事情聴取を受けたくはなかった？」

「まあね。情報提供の意志がないわけじゃないけど。たとえば『なぜあそこにいたんですか？』って言われたら、ミーティングのためって正直に答えるよ。でも『なんのミーティングですか？』ってこの機に乗じてグイグイ言われたら、ちょーっと商売に大打撃ってレベルの話じゃなくなっちゃうかな。黙秘を遠そうものならまた因縁つけられるし。あ、誤解しないでね。そんなにひどいことはしてないよ。でも……………」

「ポリスとカンパニーも、一枚皮を剥がせば陰悪ですしね。何かを

口実にして絡んでくるのは想像つきます」

スティアが納得すると、ミナはきよんとした。

「君、詳しいね。業界について研究した？」

「そういうわけじゃないですけど」

その時、ミナの背後で、エントランスの扉が開いた。

リリイたちが一斉に顔を向けた先に、スーツ姿の中年が立っていた。やや太りぎみのその体格には見覚えがある。

「マッシュさん！」

ミナの歓喜の声が、想像を肯定した。と。

マッシュは乱暴な足取りでミナに近づいて、その華奢な手首をぐいと掴んだ。リリイたち三人も目を丸くしたが、誰よりも驚いたのはミナだった。困惑の声。「ちょ、ちょっと、マッシュさん？」

「来なさい、ミナ」

低くそう囁いたかと思えば、ミナの肩越しにスティアの顔をはつきりと睨む。「こっちへ」

「ちょっと、マッシュさんいやその、この子たちは助けてくれた人で、私にとって恩人だから、さっきの暴力くんとはぜんぜん違ってー」

「きみはあれから報道を見ていないだろう」

マッシュは確信に満ちた低い声で、ミナを力づくで押さえ込む。

「来るんだ」

啞然とするリリイら三人に構わず、マッシュはさっさと施設にミナを連れ込んでしまう。悪漢にさらわれる姫君よろしく、その腕の隙間からミナが叫んだ。

「ごめん、待ってて！ お礼はするから、ほんとにー」

ぐいぐいと引っ張られながら、声だけが強くこちらに届く。

「ごめんなさい、お願い！」

リリイはドアにさらわれたミナの姿をぼかんと見つめながら、理不尽の前ではさすがに彼女も「ごめんなさい」なのかと、のんきなことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2120n/>

グレイゾーン2

2011年10月10日12時50分発行